

AKINORI HASHIMOTO

橋本昂祈

3歩進める  
ときもある





# 目次

プロローグ	1
目次	6
第1章	
～幼き日の回想～	13
～せーかんるーき～	16
～おばあちゃんの部屋～	20
～カツオみたいなお兄ちゃん～	22
第2章	
～幼稚園から小学生時代～	29
～学校のイベントには必ず来る父親～	32
～ソフトボールチームに所属していた頃～	35
～おサルさんみたいに身軽な少年だった～	38
～スポーツしてる以外は『無口でおとなしい少年』だった～	41
第3章	
～中学校時代の挫折と憧れ～	47
～恋愛より友達??～	50
思春期の心の中～内なる悲鳴～	53
～中3のノイローゼ～	57
番外編	
個性を受け入れる事～三步の通解・番外編～	65
第4章	
～高校リタイア～	71
～母に告げた言葉～	74
～フリーター～	77
～世間知らずの15才～	81
～試練～	84
～人間不信の根～	87
～眠れない夜～	90
～鏡に映る自分～	95

～変わらぬ朝～	99
～助手席で眺めた風景～	103
～引きこもりの物語～	108
～祖母のお世話係～	112
～友人たちとエレキギター～	116
～毛布に包まりながら～	121
～当時のアルバイト・16才から18才まで～	125
～なんくるないさ～命が宝（ぬちどうたから）	130
～苦手克服シリーズ・水泳編～	135
～シドニーオリンピックに重ねた夢～	138

## 第5章

～革命のギタリスト・再会～	145
～新城くんと橋本くん～	150
～ギターがくれた出会い～	155
～KJさんのパスタ～	159
～親友で戦友～	163
～チャンスより友達を選んだ男～	167
～闇の散歩も光の一步～	174
～心療内科の門～	178
～数字の魔法と信仰と～	182
～心に残る言葉～	186
～太陽散歩の3歩くん～	189

## 第6章

～社会復帰・酒屋～	197
～バイクに乗りたい～	201
～英会話スクール～	204
～3歩くん。宇宙を思い浮かべながら～	207
～苦手克服シリーズ2・ウェイター編～	211
～ホテルの常備配膳人～	214
～3歩くん。横浜中華街に降り立つ～	217
～ボスと姫と逆ギレ王子～	221
～ヒメVS王子～・恋愛アドバイザー編・	225
マスカケ線ってなに？ アジアの神秘手相屋さん	230
～ピュアBOY☆真夜中過ぎの乾杯☆～	234
～ピュアBOY☆真夜中過ぎの乾杯2☆～	238
～守ってあげて。☆ヒメと花束☆～	243
～英会話スクール☆淡い恋心と仏法者の青春～	248
～新城が結婚？？ ☆3歩くんの決意～	253

## 最終章

～桜梅桃李・十人十色～ . . . . .	261
～風呂なしアパートと東銀座～ . . . . .	269
夢追い人 . . . . .	274
夢追い人2 . . . . .	277
夢追い人3 . . . . .	279
3000人の精鋭を代表して . . . . .	282
3000人を眼前にして放つ言葉 . . . . .	285
3歩進める時もある . . . . .	287
ていんさぐぬ花～沖縄民謡～ . . . . .	290
その後の3歩君と仲間たち . . . . .	293
MYWAYを聴きながら . . . . .	296
あとがき . . . . .	300



## プロローグ

『あきのりは友達100人できるかな?』

幼き日、父親が僕に言った。

あの頃は信じていた、光輝く永遠の幸せの道がある事を。

季節は冬から桜舞う春へと…

儂く散ってしまう少年の夢は優しい春の唄のように温かで繊細な物語を紡ぐ。

大人になり段々と忘れていく心の痛み。

夢や希望はどこかに置き忘れたのだろうか??

『いや、僕は忘れないよ。キミに出逢えてたくさんの魔法をかけてもらった。』

たくさんの苦難や心の傷と引き換えに、少年は誰よりも優しい青年へと成長した。

決してたくましいとは言えないし、誰よりも繊細で純粋な心。

少し間違えば『壊れてしまうのではないか?』と思うその青年の心も

数々の試練を乗り越えるたび

『生きるとはどういうことか?』

『人の幸せとは一体なんなのか?』

時に立ち止まりながらも、

自分なりの答えをだしていくのだろう。

『初めて産声をあげた日の事』

貴方のお母さんは命がけて出産に挑んだのだろうか？



貴方のお父さんは命がけで護ろうと決意した事だろう。

それと同じように僕たちも誰かを少しでも思いやる事ができたらいい。

引きこもっていた青春時代

今はまだ卵の中に籠るヒナ鳥のよう。

殻を破る日を待ち望む人たちがいる事も知らない。

世界には素晴らしい人たちが待っている事も、

それとも傷つけあうだけの人たちもいることも、

多くを感じ取っていてそれでも信じる勇気を持てた事。

少年は殻の中で何を感じ何を考えていたのだろうか？

僕は記憶の中にそれを探す。

ただ家に引きこもっていただけに思えた青春時代の心の痛み。

でも、それは光の道へ進むための合図だった。

春の木漏れ日から季節は巡り、

大好きな夏がやってくる。

大きく羽ばたく瞬間がきたようだと青年は心を燃やす。

何度も何度も失敗しては立ち上がり、

立ち上がるたび『志』大きくやがて途切れぬ川となる。

誰よりも優しい心を持った人よ、

世界はあなたを待っている。

その悲しみも憎しみも全てを受け入れて

真に人を愛するパワーに変えて。

著者・表紙イラスト

橋本 昂祈 (はしもとあきのり)

# 目次

プロローグ

## 第1章

幼き日の回想

せーかんるーき

おばあちゃんの部屋

カツオみたいなお兄ちゃん

## 第2章

幼稚園から小学生時代

学校のイベントには必ず来る父親

ソフトボールチームに所属していた頃

おサルさんみたいに身軽な少年だった

スポーツしてる以外は『無口でおとなしい少年』だった

## 第3章

中学校時代の挫折と憧れ

恋愛より友達？

思春期の心の中～内なる悲鳴

中3のノイローゼ

番外編

個性を受け入れる事～三步の通解・番外編

第4章

高校リタイア

母に告げた言葉

フリーター

世間知らずの15才

試練

人間不信の根

眠れない夜

鏡に映る自分

変わらぬ朝

助手席で眺めた風景

引きこもりの物語

祖母のお世話係

友人たちとエレキギター

毛布に包まりながら

当時のアルバイト・16才から18才まで

なんくるないさ～ 命が宝（ぬちどうたから）

苦手克服シリーズ・水泳編

シドニーオリンピックに重ねた夢

## 第5章

革命のギタリスト・再会

新城くんと橋本くん

ギターがくれた出会い

KJさんのパスタ

親友で戦友

チャンスより友達を選んだ男

闇の散歩も光の一步

心療内科の門

数字の魔法と信仰と

心に残る言葉

太陽散歩の3歩くん

## 第6章

社会復帰・酒屋

バイクに乗りたい

英会話スクール

3歩くん。宇宙を思い浮かべながら

苦手克服シリーズ2・ウェイター編

ホテルの常備配膳人

3歩くん。横浜中華街に降り立つ

ボスと姫と逆ギレ王子

ヒメVS王子～・恋愛アドバイザー編

マスカケ線ってなに？ アジアの神秘手相屋さん

ピュア BOY ☆真夜中過ぎの乾杯☆

ピュア BOY ☆真夜中過ぎの乾杯2☆

守ってあげて。☆ヒメと花束☆

英会話スクール☆淡い恋心と仏法者の青春

新城が結婚?? ☆3歩くんの決意

最終章

桜梅桃李・十人十色

風呂なしアパートと東銀座

夢追い人

夢追い人2

夢追い人3

3000人の精鋭を代表して

3000人を眼前にして放つ言葉

3歩進める時もある

ていんさぐぬ花～沖縄民謡～

その後の3歩君と仲間たち

MY WAY を聴きながら

あとがき



# 第1章



## ～幼き日の回想～

1980年 8月27日 東京で僕はこの世に生を受けた。

僕は3人兄弟の末っ子で、6才上の兄・3才上の姉。

そして、父・俊夫と母・えみこの5人家族で東京の貧乏長屋に暮らし育ちました。

幼少期の僕と言えば、女の子に見間違えう程に肌の色は白く、身長は華奢で、

性格はとてもおとなしく控えめでナイーブだったと親から聞いております。

とても自由奔放な性格で、様々な職に挑戦していた父。

そして、故郷・沖縄の実家から時に仕送りをしてもらいながら、精一杯に、家計を切り盛りしていた母。

この頃の僕らの家族の生活はとても貧乏だったけど、でも幸せだった。

小さい時の詳細な記憶はあまり残ってはいないけど、その中でも、ずっと忘れずに今も覚えていることは

他所のオジちゃんが毎日のようにうちと一緒にご飯を食べたり、お母さんやお兄ちゃんやお姉ちゃんと銭湯に行ったり、お風呂上りには瓶の牛乳を買ってくれた。

駄菓子屋さんに連れて行ってもらおうとUFOみたいなチョコレート菓子を買ってもらい、

兄はすぐにそれを食べてしまうけど僕はもったいなくて大事に手に握って家に帰ってから食べる。

お姉ちゃんにくっついていくと近所の家でケーキやココアを食べさせてくれた。

おばあちゃんの家に行くときはちょっとした探検だ。

おっきいおばあちゃんはいつも布団に横になっている。おばあちゃんからカンカンの飴を貰った。

おっきいおばあちゃんに缶のフタを開けてもらう。飴を一粒口にすると嬉しくなって

寝ているおっきいおばあちゃんの周りをグルグル走って回る。

カンカンのフタはおっきいおばあちゃんしか開けられないみたいだ。お母さんもお父さんもおばあちゃんも開けられない。

おっきいおばあちゃんの手は魔法の手だ。

そんな僕の家には転機が訪れたのは、僕が4才になろうとする頃でした。

父・俊夫の母（僕からすれば、おばあちゃん）と一緒に暮らすため

大田区の蒲田に新築のピカピカのマンションを購入したのです。

以前の古い長屋とは違い、新築マンションの目の前には大きな公園。

その公園内には、僕の大好きなブランコや、お砂場や、すべり台。

へんちくりんな動物の遊具まで。

それらを取り囲むように、大きくて立派な樹木が植えられており、その周辺には

丸い形の花壇やベンチまでありました。

公園ではホームレスのおじちゃんの秘密基地もあったり、楽しいなって思っていた。

～せーかんるーき～

東南の角部屋、国道に面しているため、少し音はうるさいけど日当りはよさそう。

僕んちの下には、釣り具屋さんみたいだ。でも、僕は釣りには興味ない。

おばあちゃんの部屋は和室で仏壇が置いてあったり、神棚があったり、足でキコキコ動かすシンやテレビなんかもあったり、お菓子をくれたりすごく居心地がいいんだ。

おばあちゃんはカルタやゴム遊び、おはじき、ビー玉…色んな原始的で大正モダンな遊びを教えてくれた。

お母さんが働きに出るようになってからは、おばあちゃんが僕の友達だったんだ。

おばあちゃんはある一定の時刻になると『おばあちゃんこれからね、神さまと仏さまに祈るから、またあとで遊ぼうね』と言って仏壇に祈りだす。

なにやら？ 日本語ではないような不思議な呪文を唱えている。

ちょっとそれには興味があった。

それが終わると神棚に向かって手を合わせて祈りだす。

(なんかすごいおばあちゃんだ！) と思っていた。

神さまには『せーかんるーき』という同じ言葉のくり返しくり返しループした。

(同じ言葉のくり返しか？ これには興味ないや)

『あきちゃんも一緒に祈ってみるかい？』と軽く誘われた事があった。

ちょっとどんな感じなのかを体験してみたくて、僕もおばあちゃんの教えの通りに祈ってみた。

『あんまり、おもしろおものじゃない』って思ってスグにやめた。

『おばあちゃんのお祈り』の時間は誰もかまってくれないから退屈で仕方ない。

他の家族は仕事に行ったり、小学校に行ったり…。

僕は一人で外に出る事は許してもらえなかった。

『誘拐されちゃうから』『車にひかれて死んじゃうから』

『迷子になったら大変だから』大人はそう言ったけれども、大して起こりそうにない事ばかり心配しているだけだ。

だから、結果的にはテレビだけが唯一の娯楽だった。

おばあちゃんと『水戸黄門』を見てそれが終わったらお母さんがパートから帰って来る。

僕は仔犬のように帰って来た母の元へ走り

『あのねっ！ あのねっ！』『聞いて！ 聞いて！』のかまってチャンに変身する。

母はいつも笑顔を絶やさず、南国・沖縄の気質を持っていて頑張り屋さんなんだ。

僕の事は『あ～よかったねえ～』『えらいねえ～』と、適当にあやして

『お母さん、今からご飯の支度しなきゃねえ～』と、素早くエプロンに着替えて、夕食の準備に取り掛かる。

『おばあちゃんと遊んでなさい』『テレビを観てなさい』と言われるのがオチだけど、

僕はお母さんの側から離れない。

かまってくれなくても、お母さんの近くでゴロゴロしてる。

たまに話しかけてみるが母は料理に夢中。鼻歌まじりでゴキゲンだ。





## ～おばあちゃんの部屋～

小さなガラス戸付きの棚には、おばあちゃんのカステラやかりんとう、こんぺいとう等、日によって違うお菓子が入っていて、おばあちゃんがこの棚のガラス戸をあける時、いつも何が出てくるかわからない。

まるでアニメのようなドラえものの四次元ポケットのような驚きと感動があった。

おばあちゃんの部屋にはダンスが2つある。

ひとつは背の高い洋服ダンス。並んで、昔ながらの桐ダンスは年季が入っていて鉄の引手も、真っ黒くろすけ。

何が入っているのだろうか？ 僕はいつも不思議に思っていた。

だって、おばあちゃんはだいたいいつも同じ服を着ているんだもの。

2つもダンスがあっても中身は空っぽなのかな？

すごい宝物が入っているのかな？

幼心におばあちゃんの部屋は魔法がかかったような不思議さを感じた。

昔ながらの押入れにも幾つものハコやカンカンや、収納ケースがびっしり詰まっている。

僕は『何かオモシロイオモチャでもないかな?』と思って

よく押入れの物を引っ張り出して遊んでいた。

全てが絶妙のバランスで積み上げてあったので何かを引っ張り出すそうとすると雪崩のようにザザッと、カンカンやハンコまで落ちてきて古い新聞や昔の写真などが散乱してしまうこともあった。

ドアの上にはおばあちゃんとおばあちゃんの妹さんの2ショットの写真が飾られてある。

おばあちゃんの妹・通称・大森のおばあちゃんは、いつも家に来る度においしいフルーツや海苔を持って来てくれる。

おばあちゃんは大森のおばあちゃんに来る事が1番楽しいみたいだ。

いつも笑顔で優しいおばあちゃんだけど、その時はいつにもまして幸せそうな顔をしている。

～カツオみたいなお兄ちゃん～

兄は学校から帰ってくると、ランドセルを置いてすぐに遊びに行ってしまう。

『サザエさん』のカツオみたいな男だ。

僕はあのアニメを観るとカツオと兄貴がダブって見えて仕方がない。

ちなみに。姉ちゃんはワカメちゃんのような人だとずっと思っていた。

下の兄弟の面倒みの良い優しい所は、ワカメちゃんそっくりだ。

そうすると『僕はタラちゃんか?』と、当てはめてみたが

僕は奴があまり好きではない。

奴は坊ちゃん坊ちゃんしてて『何ですか～?』が口ぐせで『幸せですう～!』なんて臭いセリフを平気で言ってみせる。

『赤ちゃんかっ!』といつもツッコミを入れていた。

家族からは『あきのりは、タラちゃんだね』とつっこまれると『一緒にするなっ!』と思っていた。

今思えば、末っ子特有の『僕が1番に決まっている』という自信と、排他的『気に入らん!』という心理が働いているように思う。

どうでもいい話したが。僕は海苔が大好きだ。出されれば何枚でもパリパリ食べる。

姉がその様子を見て

『名前が、あきのりだから(のり)が好きなんだね〜』

みたいなことえお言ってこようものなら、心の中で『つまんね! くだらねえ!』と思っている。

悪いクセだが一般社会にあって、人が集った時、どーでもいい事を話ししている場面は多くある。

僕はどーでもいい会話に入っていく術を知らない。

なぜかという人にな合わせる事が苦手だから。

一対一の会話ならまだ合わせようがあるけど、円卓の席だの、親族の集まりだの、よく

どうでもいいような内容の話を広げて発展させたり、人に話をふったりというような社交性コミュニケーション術は、昔も今も持ち合わせていない。

どこまでも自分本位というわがままな気質は家庭環境からも来ているのでしょう。

そういえば、父もあまり家にいない人だった。というか、トラックの仕事をしていて夜8時位に家を出て朝の6時位に帰ってくる生活リズム。

朝、お父さんが帰ってくると、必ず会社で作っている飲み物や練り物

揚げギョウザなど、なんらかしら買って来てくれた。

コーヒー味やフルーツ味の豆乳、ヤクルトまがいの乳酸菌飲料。

おでん、練り物、かまぼこなんかも。中にチーズとポテトの入った揚げギョウザは

兄弟でも取り合いになる位においしかった記憶がある。

兄貴は、いつもは優しいのに料理になると人に譲ることをしない。

うちは家族が多いため料理も大皿に盛られて出てくる。

なので早いモノがちでどんどん美味しいところがなくなっていき、末っ子の僕は食事の席では兄貴には逆らえないのです。





## 第2章



## ～幼稚園から小学生時代～

父がピカピカのランドセルを買ってくれた。季節は冬からサクラ咲く春へと…

だんだんと暖かなやわらかい春の到来を知らせているかのように若葉はゆれる。

心地よい風が吹く。そんな季節をだれもが好きになる。

家の近くのスーパーへお父さんと買い物に行くと、春のウタが流れていて、

～友達100人できるかな～ という一小節が小さな胸を熱くした。

『友達100人できるのかな？』と父が何かを期待しているような顔で僕に聞いてきた。

『できるよ100人。それ以上にできるかもしれない』ビッグマウスの僕は『できない』という言葉は頭の中に一切なかった。

よく父は僕に『～できるかな？』という質問投げかける。

それに対してプライドの高い僕は、子供心に『負けたくない』と思うのだ。

本当は誰よりも純粋で素直で優しくて、でもちょっと人見知りなだけなんだ。

幼稚園の時の卒園アルバムを見ると、今でも笑ってしまう位に僕が笑った写真はない。

なんか、先生が『バンザイ！』とか『ピース！』って促している場面でも、

僕一人だけものすごく微妙な中途半端なピースをして表情はおどおどしている。

客観的に見ても『周囲から浮いている』って思ってしまう位にシャイで内気な男の子でした。

今から思えば僕にとって両親やおばあちゃんや兄や姉、家族の中が僕の1番居心地の良い場所だったのだろう。

女の子たちと一緒に砂場でおままごとや砂遊びをやっていた記憶しかない。

男の子たちにも『遊ぼう！』って誘われるのだけれど、同時に女の子からも『あきちゃん、こっちで遊ぼう！』って言われると、なんか自然と女の子たちと遊ぶ方を選んでしまう。

毎回ではないにせよ、80%位の高確率で。

おばあちゃん子だったので、僕は『仮面ライダーごっこ』を男の子たちと一緒にやるよりも

おばあちゃんのように優しい女の子たちのやんわりした遊びが心地よかった。

## ～学校のイベントには必ず来る父親～

入学式、笑っちゃいけないんだけど爆笑してしまうんだ。

みんなはほとんど母親が入学式に来てるというのにも関わらず、男で入学式の写真に写っているのは僕の父親だけでした。

思えば何かの学校行事には必ず父親が来てくれる。

運動会では朝早くから並んで一番いいポジションを確保し『大きなビデオカメラ』を持って撮影していた。

親ばかりの極めつけは小学校3年生の移動教室から帰ってきた時、学校の正門の前で父が買い物袋一杯にお菓子やジュースを買って待っていてくれたのを目撃したときに感じた。

あの時笑えるのは、恐る恐る父に近づいて横から『お父さん！ お父さん！』と2回くらい声をかけても父は全然気がつかないのだ。

幸せそうな笑みを浮かべて、誰かが出てくるのを見つめている様子。

（イヤ、僕のこと待ってるんでしょ？）横にいるっつーのに全然気がつかないんだもの。

何度もねばって『お父さん！』って呼んでみたり、父の二の腕あたりえおポンポンしたり。

笑えてきた。しまいにはしびれを切らしたのか？ あたりを2、3回キョロキョロしだした。

(いやいや、あなたのためっちゃ近くにいるって！ さっきからずっと・笑)

10分位そんな事を親子でやっていて、全然気がついてくれないから先に帰ってようと思って。

『ただいま〜』って母に言って、父親に見つかったらまずいと思って部屋の隅で隠れていた。

その後、しばらくして帰ってきた父は開口一番、母にこう言った。

『あきのり…いなかったなあ…』と残念そうに…

部屋の奥でこっそり盗み聴きしていた僕は(えーっ、ウソでしょー？ あんだけ声かけたのに？)と思った。

部屋からひょっこり顔を出し、逆に僕が『お父さんおかえりなさい』と言った。

『お父さんそのビニールは？』(さっきさんざん見たから知ってる。お菓子やジュースだ)

僕は知らん顔で聞いた。

『あぁ、スーパーでお菓子とかジュース買ったからさ、手洗って食べな』

『うわ～いっ!』(あぁ、やっぱり僕の事待ってだんだ、安心した・笑)



## ～ソフトボールチームに所属していた頃～

『ファイターズ』という僕らのチームは

先輩たちの代から区内の優勝候補に挙げられる強豪チームでした。

僕は他の子よりも半年くらい遅れてチームに入ったのだけど、チームに入った日の翌日、城南地区の大会があると言われていきなりレギュラーでサードを守らせてもらったのだ。

それからセカンドにコンバートされて以来、たったの1度もレギュラーから外された事はない。

4～6年生まで土日は必ず練習した。

僕の住む区を東西南北に区切った地区大会では僕らは常に優勝。

区大会ではいつも惜しいところで準優勝。

コーチや監督、父母の皆さんも温かくて、トン汁を焚きだして食べさせてくれたり、合宿と称して出かけては、ほぼ毎日ソフトボールとは全く関係のないスケートリンクへいき遊んだり、マイクロバスで色んな所へ連れて行って遊んでくれた。

どんな学校においても一人はいるであろう『エースで4番・学年でも人気者』のH君。

彼は僕の中じゃスーパーマンだ、女の子からも当然モテる。

体育の授業でも彼・H君は何をやらせてもトップ。

そんな、H君にいくつか勝てる分野が僕にはあった。それは…

『ミニサッカーと50m走』だ。

ミニサッカーでH君と僕は得点王の争いをしていた。

ファイターズでも不動のエースの彼に『1回でも勝ってみたい!』という気持ちがあった。

体育の時間の後にゴールした数をシールで貼っていく。

言っても、僕は昔からサッカーが大好きだ。

H君に負けじと毎回コンスタントに得点を重ねる。

気がつけば僕とH君が他の子達よりズバ抜けて得点を積み上げていき、最後わずか2得点差でH君にセリ勝った！！

この時は嬉しかったし、自信にもなった。

50m走。僕は子供の頃から『ちょこまか』と落ち着きのない子だったので、自然と足は速くなっていた。学校で1番！ というわけではないけど、上位のタイムをキープした。

H君も当然のように足は速かったが、ぎりぎりでもセリ勝った。

(ちなみにこの時の1位は女子だったのだが…)

一生懸命努力すれば『スーパーマン』にも勝てる分野があるという事は、

僕にとっての大きな自信になった。

～おサルさんみたいに身軽な少年だった～

運動会ではリレーの選手、組み体操の三重の塔では『ひょいひょい』と1番上に登って、両手広げてポーズを取る。

徒競走では組み合わせに恵まれたのか？ 1位以外取った記憶がない。

バスケットボールやドッジボールも得意だった。

体育時間に先生が4人のリーダーを選出して、僕も選ばれた。

その選ばれたリーダーたちがドラフト会議みたいにして順々にクラスメイトを引き抜いてチームをつくるのだ。

出来るだけいいチームにしようとしてリーダーの僕は考えて、ドラフト1位で相性のイイ子を選出した。

その子を副キャプテンに任命し、相談しながら人選を進めていく。

今思うと『人柄重視』の僕のチームは、弱小チームだったけど楽しくやっていた。

同級生たちからは『運動神経がイイ』と言われていた僕でも苦手な分野があった…。

『プール』である。

僕は全く泳ぎが出来なかった。みんなは『ハシ（僕のこと）が泳げないのが不思議だ』と口を揃えて言う。

『水が怖い』あの頃は何が怖いって、水が1番怖かった。

だから、プールの授業が1番憂うつだった。

仮病を使って親をだまし、休む事もあった（どうやって回避するか？）

色んな悪知恵を働かす。

『休み時間にサッカーで足を痛めましたので…』

『水着を忘れてしまいました…』

『低血圧なのか？ アタマが痛いので…』 e t c …色んな理由をつけて見学していた。

同級生はみんないい奴で心配して声をかけてくれた。

『ハシ、頭痛いんだって？ かわいそうに…』

『ハシ、大丈夫か？ 気分はどう？』

( みんなイイ奴だなあ )

と、思っていたらとある日は先生から

『橋本君、水着だったら学校に予備があるよ！

今日はガマンして次からは忘れ物しないようにな！』

と言われて、ご丁寧に予備の水着を持ってきてくれたのだった。

( こんなパターンもあるのか？ トホホ… )

プール開きから9月のあたままで、毎年アタマを悩ませていた。

～スポーツしてる以外は『無口でおとなしい少年』だった～

スポーツで目立つ存在ではあるが、他は至ってノーマル。

オモシロイ事を言って笑わせるわけでもない。

女の子には特別好きな子がいたわけでもない。『マジメで優しい良い子』だ。

と同時にあえて人と違った事をやってみたり、空想にフケッたりする変態でもある。

そんな僕が、バレンタインデーにはほど遠い僕が、キセキ的に毎年女の子からチョコを頂いた。

『本命のチョコレートとギリのチョコレート』という2種類のチョコレートがあるらしい。

小学校2年の時、ある女の子がチョコをくれた。3年生の時も同じ女の子がチョコをくれた。

（これは手作りです）と、中に紙が入っている。

『手作り』の意味がわからなかった。チョコを手作り？ なんだソレ？

チョコって作れるものなのか??

頭の悪い僕は、カカオを砕いてミキサーにかける様子が浮かんだ。

カカオって、どこに行けば売ってるんだ? スゲーな。

5年生の時、バレンタインデーという日にわざわざ女子が3人位でうちに来た。

一人の女の子が『手作りで作った』と言う。他の女の子は『ギリチョコね』と言ってチョコをくれた。

この頃になるとだいたい世間に疎い僕でも、なんとなくわかっている。

その子は6年生の時も同じように手作りのチョコレートを僕にくれた。後々に知る。

『小学生くらいの女子にとって、バレンタインデーは特別は日だったのだ』と。

『本命だったんだよ』と言われるケースもあった。

『ハシ（僕のこと）事が好きみたいだよ』と友人から聞くケースもあった。



後に13才位でアプローチされた女の子も、元をただせば小学校からの同級生だった。

彼女らの中で『橋本昂祈』という少年は少なからずとも、いい思い出として大事に

しまっているのかもしれない。

僕だって、こうして良い思い出として大事にさせてもらっている。

『優しさをありがとう。』

『思い出をありがとう。』



## 第3章



## ～中学校時代の挫折と憧れ～

僕はプロのサッカー選手になるのが夢だった。

中学にあがるとすぐにサッカー部に入部して、同期のみんなと毎日遅くまで練習した。

けれど、僕のライバルは同期ではなく『実の姉貴の残した記録と記憶』だった。

僕の入学と同時に中学を卒業した3才上の姉は、在学中に陸上部で華々しい活躍をして  
いたらしく

『橋本先輩の弟くん』と言われ続けたのだった。

(僕には、あきのりって名前があるんだ！)

当時1500mの区内で2位のタイムを持っていた姉貴の存在は誇らしくもあったけど、  
やっぱり『越えたい壁』だった。

『ねぇちゃんなんて、軽く超えてやるぜ！！』と思ってたけど。

～謎の貧血～

ストレス耐性が人よりも弱いのか?? 『貧血』という地味な病気になって、階段を登るのもしんどい状況になってしまった。しかも一年生の教室は4階まで登らなくてはならず、毎回息切れしてしまい、血の気が引くような感覚でいて、大好きだった体育の授業も見学せざるを得ない状況だった。

内科の先生は、『輸血すればすぐに治るんですけど、

あきのり君はまだ若いからお薬と食事与自然になおしていきましょうね。』という。

部活にでどころか学校を早退しては病院通いの日々はプライドがズキズキと痛んだ。

(身体はちっともよくならんなあ。もう、考えないようにしようか。。。)

スポーツが出来ない自分の心を埋めるように、音楽やファッションといった俗っぽい物に興味を持ち、恋愛もしてみたいなあなんて思うようになった。

6才上の兄貴は当時専門学校に通いながらアルバイトをしていたので、兄貴のちょっと大人なライフスタイルに強い憧れを抱くようになりました。

ファッション、音楽、ヘアスタイル、マンガやゲームはほぼ兄貴の影響を受けたし(笑)

兄貴は意外に(失礼?)女性にモテる男という事が発覚した時の衝撃(笑)

仲間や友人や彼女と楽しそうに充実した日々を送っている兄貴は、中学生の僕にとって

一番の『ファッションリーダー』であり『憧れ』だった。

ちなみに永遠のライバルである姉貴は高校進学と同時に陸上を辞めた。

『区内で2位のタイム?? 全国ではどんだけいると思う?? 私なんて大した事ない』

姉貴は就職率の高い商業高校に進学しアルバイトもして普通の女子高生の青春を選んだ。

姉と僕とは『似たもの同士で真逆の人生』かもしれませんね。

～恋愛より友達??～

中二の時、隣のクラスの女子が僕に好意を持っているようだと言った友人経由で聞く。

『ふう～ん。あっそう？ へえ～あいつがねえ～』と興味なさげに振る舞ったが

『告白されたらどうしよう?』と勝手に思った。

ある休み時間に僕が机に顔埋め寝ていると、教室の外で誰かが僕を呼ぶ声がある。

『はし～。はし～』と。(橋本なので『はし』というあだ名)

薄目でちらっと見ると、

女子が3人位で立って一人の女の子が僕の事を必死で呼んでいる。

(オレの事好きとか言っている噂の女だ。どうしよ?)



『ハシ〜！ ちょっと用事があるからこっちきてお願い』と、その子の友人が元気よく言った。

(おい、やめろって！ めっちゃみんなに聞こえてんじゃん！ 用事あるなら直接こいよな)

授業のチャイムが鳴り女の子たちも自分たちの教室へと帰って行った。

次の休み時間。

『ハシー！』『はしもお〜』『おーい』

薄目でちらっとみると

(なんか人数増えてないか？ だから大事な用なら直接きてくれよなあ。)

僕は結果的に2回も無視した事になる。

その日の放課後、親友が僕に言った。

『お前さ。あの子の事どう思ってるわけ？ マジでお前の事好きみたいだぜ。』

あの子の親友に聞いたから間違いないって。なあ。』

『そんなん急に言われてもな。ピンとこねえし。なんで俺なんか？』

『ずっと想ってたんじゃないの？ 付き合っちゃえよ。控えめだけど可愛い子じゃん。』

『ん～。あ！！ ど～する今日？ 金田一少年の犯人だれだろな？』

『あっ、そっか今日水曜日か？ マガジン買ってうちで見ようぜ！』

中二の自由気ままでお気楽な感じがいい思い出。

## 思春期の心の中～内なる悲鳴～

『他人の評価』は全くアテにならない。

でも、思春期まっただ中の僕は

『他人にどう見られているか？』

なんて事ばかり気にしていた。

中学三年生の頃『ノイローゼ』になる位に『言葉の持つ不快感』と戦っていた。

『キモイ』(気持ち悪いの意)なんて言葉は日常的に使われているが

『自分も他人も』いい気持ちがない言葉だ。

僕が中学生の時は『メディア』の影響力は絶大で

『流行』も全て大人たちが作り上げたものである事に全く気がつきもしない。

『MK5』『チョコベリバ』『キモイ』は当時の女子高生たちの流行りの言葉。

僕はある特定の女子グループからそんな言葉を言われ続けた。

なんにも『悪い事はしていない』のに、

『キモイ』『マジむかつく』とわざと聞こえるように相手に放つ。

彼女らとしては楽しんでいるつもりか？ 様々なストレスを抱えながら『相手をいたぶる事』でしかきつと『心の閉塞感』や『孤立感』を埋められなかったのだろう。

通学途中、見知らぬ女子高生のグループ。通りすがりの僕に『きも〜い』と言った。

見知らぬ人も言ってるのだから『自分の容姿は気持ち悪い』んだ。と僕は肩を落とした。

僕がそんなにまで容姿にこだわっていたのは『ドラマのような恋愛』をしたかったからに違いない。

『メディア』は連日『暗いニュース』ばかり報道し『イジメ』や『不登校』『引きこもり』が社会問題として大々的に取り上げられ、『イジメを苦しめた自殺』や『少年による凶悪犯罪』『女子学生の買春』などなど『大きな時代の流れの変化』のようなものを繊細な心の内に感じとっていた。

『今まで普通』とされてきた事が『通用しなくなり』

『壊れ始めた』のは政治的な話しや経済の話しだけでなく、

『心』

の問題が大きく取り残されて無視され続けた結果である事は知る由もない。

そんな殺伐とした時代に僕らは生まれ『傷つけあいながら』『自己防衛しながら』生きてきた。

街を歩けば『不良少年』に声をかけられ『恐喝』にあうなんて事は日常茶飯事。

『女子高生の集団』はだるそうな顔付で『誰かの悪口』言って盛り上がってる。

僕は『繊細で壊れやすい心』を持っているようだ。

『誰かに悪く見られている自分がいる事を受け入れられず』に『強がっていた』けど、

そんな『自分』を認めたくなかった。

学校にいけば『キモイ』と言われ街を行けば『危険』な目にあい、

僕の心は悲鳴をあげていた。多分『ノイローゼ』が行き過ぎたのだろう。

『他人の評価なんてアテにならない』そのことを僕が知るには

『いくつもの失敗や経験』が必要だったに違いない。

自分の眼でみて『やってみて』良い事も悪い事も知り、

自分に合った幸せな生き方がある事。

それを『掴む』にはお金も知識も知恵も足りない『逃げ場』さえなかった。

思春期の心の難しさと自分が乗り越えるべき人生の試練と遭遇した年。

『自分の使命』だなんて考えもしなかった『思春期の心の葛藤と苦悩の日々』

## ～中3のノイローゼ～

仲のよかった友達らとは全く別々のクラスになり中三のこのクラスはなんだかつまらない。

この頃思春期まっただ中の僕は受験戦争の渦中において、しかも反抗期も重なった。

僕らのクラスはみんな和気あいあいという感じは一切ない。

グループを作って好き勝手にやっていた。

『不良気取り』のグループはなにかにつけて僕にちょっかいをだしてきたし、

『アムラー気取り』のグループからは『キモイ』だの言われ続けた。

『バカにされている』事に妙に怒りを覚えた僕は『絶対かっこよくなってやる』と思っていた。

ある日『まゆ毛をセルフカット』して失敗してしまった事も。(爆笑)

髪のを『ジェル』でカチカチ (白い粉が出るくらい) になるまで固めた事も。(爆笑)

ありとあらゆる『自分なりのお洒落』を試し続けた。

(その努力を勉強に向ければよかったですね。笑。)

得意だったスポーツもヤめた。勉強も普通レベル。

ただ『カッコイイ男』とか『センスいい』とか『お洒落に』みられたくて。

誰からも愛されて『スポーツマン』で人気者だった過去の自分と、

『キモイ』とか言われて嫌われる自分は『どっちが本当だろう?』

『クラスで一番カッコイイじゃん』と言ってくれた女子がいた。

その反面

通り過ぎるだけで『キモイ』という女子のグループがいる。

多数決の法則で『俺は嫌われ者だ』と勝手に思っていた。



自分の容姿にも自信がなかった。思い込みの激しい自分。

『プライドの高い』僕は『よく見られたいばかり』気にして、

いつも『他人の評価』で自分の存在価値を勝手に決めていた。

どこに行っても『他人の目にさらされている』事がだんだんストレスになっていった。

友人たちとボーリングをしてても隣り合ったレーンの女性に『悪く思われているんじゃないか？』

『キモイって言われるんじゃないか？』そんなことばかり気にして素直にゲームを楽しめない。

そう僕は『悪く思われたくない』『嫌われたくない』と本気思っていて

女子から『キモイ』と言われる事に本気で傷ついていたのだ。

そんな些細な事だけど『ノイローゼ』のような状況は僕の体力を奪い気力も徐々に奪っていった。

顔色も悪く覇気がなくなり妙に痩せこけた。緊張したようなぎこちない表情しかできない。

学校でも塾でも外にいる以上、女性の視線に晒されている事が『ストレス』だった。

そんな自分だったけど学校や塾はマジメに通い続けた。

『本当は学校も塾も行きたくなかった』のが本音だけど『高校進学』することで状況が変わる事を切に願っていた。

僕は『男子校』の進学を希望していた位に女子の視線がストレスだった。

家の経済事情で『都立の共学』を受験することを決めるしか選択の余地がなかった。

その高校は兄貴の母校でもある。

6才上の兄貴は僕にとっても優しくして可愛がってくれた。

バイト代が入ると兄はテレビゲームを買って来て『一緒にやるか?』と言ってくれた。

兄は『今日買ってきた』のだと自慢げに『ニット帽』を僕に見せた。

『お前のほうが似合いそうだな。ちょっと被ってみろよ』と言って僕がニット帽を被ると

『悔しいケドお前のほうが似合うな。それお前にやるよ!』と言ってくれた。

僕の誕生日の日。

遅く帰ってきた兄は手に『G ショック』を持って一人で眺めていた。

それに気がついた僕は『それどうしたの?』と聞いた。

『ん?』とぶっきらぼうな顔して『Gショック』を僕にさしだし『これお前にやるよ』と。

僕の誕生日の事には一切触れずに『やるよ』とだけ言ったけど多分『誕生日プレゼント』というのが恥ずかしかったのだろう。

中二の時。

友人から電話でダブルデートのお誘いを受けた時にたまたま側に兄貴がいた。

会話の内容を兄なりに推測したのか『お前女の子とデートか?』ときいてきた。

『うん、後楽園に行こうって。どうしようかな??』と僕は迷っていた。

『ダブルデートじゃん! やったな。俺がおこつかいやるから行ってこいよ!』

兄の天性の明るさ、優しさ、時に厳しくも愛のあるアドバイスをくれた。

中三でノイローゼになった時、

僕はこの世の誰にも相談できなかったけど兄貴といる時間はそれは楽しかった。

兄貴みたいに自由で少し大人な世界へいきたいな。って僕はずっと思っていた。

(あの時、勇気持って兄貴に相談していればよかったのかもしれない。)

『兄貴の母校に進学すること』

環境が変われば全ては良くなると信じて弱い自分と戦っていた少年時代。

## 番外編



## 個性を受け入れる事～三步の通解・番外編～

この世界は『綺麗ごと』だけでは生きていけない。

なぜなら『どんな人間の心の中にも天使と悪魔は存在する』

僕は大人になった今でも『何が正義で何が悪魔か』と思ったりする。

大人になれば『時間を売ってお金を得るか?』『お金に縛られずに自由に生きるか?』

広い地球上では『大人になりゃ戦争に行かされる』『戦争になりゃ命が叩き売りされる』

日本は本当に良い国だ。食べ物も美味しい『水も綺麗』で治安もいい。

僕は『中学3年生でノイローゼのような状態』になり、高校進学するも『不登校』になり

強制的に『大工の見習い修行に行かされ』て、『心身共に限界を超えてしまった』

家に引きこもるようになってからは『狭い世界で生きていた』からなにもかも解らな  
かった。

『自分だけが辛い思いしている』と思っていた。『普通でいられない自分に愕然としてた』

インターネットの環境もPCも僕が引きこもっている時代には高値の華で買えませんでした。

だから逆に『修行のように思って踏ん張れた』青年期があったのかもしれない。

僕は今でも『引きこもり』が特別な事だとは思いません。『異常でもない』『甘えでもない』

『その人らしさ』や『個性』であり、『人生のテーマ』を考える機会が『チャンス』なのです。

引きこもりとは逆に

『ガンガン行動する人』にはそれなりの『人生のテーマ』と『課題』があります。

そんな人生十色の『個性』を『才能』を認め合うような時代だと思います。

自叙伝

『3歩進める時もある』の本編は『中学三年生の頃のノイローゼ』の後日談から再開し



『引きこもり』の体験を綴っていきます。(自叙伝はA4の用紙に111枚で完成した作品です。)

心の描写がリアルで暗い話しばかり続きますが脚色はせず

『事実や実体験をありのまま執筆』したそのまを配信します。

蘇生までの『体験』を通して『僕が皆様に伝えたかった事』が上手く伝わったら幸せに思います。

『引きこもりの少年の蘇生のドラマとして気軽にお読みくださいませ。』

『いつも応援頂きありがとうございます。』



## 第4章



## ～高校リタイア～

高校を早々にリタイヤした。通いだして2週間もしない頃。

中3の1年間耐えに耐え抜いてやっと掴んだ『未来への切符』の状況は変わるはず。

…変わらなかった。1年生の廊下を上級生と思われる2人組みがタバコを吸いながら歩いて行った。これも衝撃だ。

ゴミはそこらかしこに捨てられている。

相も変わらず汚い言葉がそこらかしこで行きまじっている。

僕が高校を辞めよう決意した直接的な原因がある。

ある放課後の事、友人と2人で帰ろうと約束し友人が先に靴を履いて出て行った。

遅れて僕も靴を取り出そうとした時、8人位の女子の集団が僕の元でやってきて『キモイ!』と一斉に言った。

校舎を出るまで8人位の女集団は言葉の暴力を僕に向けて言い続けた。

不覚だった…。男子同士のイザコザならまだケンカにでもなろう。さすがに人間のクズ  
と言っても

女性を殴るわけにはいかない。

この精神的に追い詰めていく卑怯な女たちに対し、ボッコボコに沈められたらどんなに  
楽だっただろう？

とにかく僕は容姿に自信がなくなった。昔から知っている人ならまだしも話もした事  
がない女子から、しかも複数人から『キモイ』と一斉に声を向けられ自分の中にあった  
プライドや自信は崩壊した。

中3の時の我慢も何の役にも立たなかった。

こんな状態のまま3年間通えるだろうか？…無理でしょう。もう僕は中3で酷いノイ  
ローゼと戦ってきたんだ。死ぬ思いで…ひとり…。

肉体的な暴力だったら身体を鍛えて仕返ししてやればいい。

精神的な暴力に対して又、それが自身の1番傷つく方法でどう対処も出来ない。

人は『気にするな!』と言う。全く持って使えない言葉である。

初めから気にしない鈍感な人間だったらそんな苦しみは無いのかもしれない。

少なくとも思春期においてその様な言葉が単独では面と向かって言えないクセに、

集団になると急に強気になって平気で残酷な事をしてしまえる女という生き物に心底落胆した。

( 人間のクズ共が！ 俺の方こそお前らの不細工面みて3年間なんて勘弁だぜ、

お前ら自分で鏡みた事あんのか？ アムラーだかなんだか知らないが

こんな社会作った大人共。お前ら全員、俺の敵だ！ )

ノイローゼから始まった自身への戦いはそのまま社会への『憎しみ』として胸に刻んだ。

自由に生きるフリーターになって夢を掴む為生きようと決意した日。

## ～母に告げた言葉～

帰ってから母親にこう告げた。

『オレ、高校辞めるワ』と。母は料理の手を止め、もう1度『なんて言ったの?』と聞き直した。

『いや、だからオレ高校辞めて別の道へ行きたいんだ』と言った。

母は一瞬凍りついて感情がじわじわと込み上げるように泣き出した。

僕にすぎるように『なんで辞めるのよ?』と。

本当の事なんて恥ずかしくて言えるわけがない。

『学校よりやりたい事があるんだ』とだけ告げた。

母はヒステリーを起し僕に対して色んな事を言ってきたが、僕は冷静に答えた。



しかし、事態はそれだけでは済まなかった。

翌日から不登校になった僕の事を近所のおばさんが心配して姉にこう聞いてきたらしい。

『あきちゃんはちゃんと学校に行っているの？ 最近見かけないけど…』

姉はその事が恥ずかしかったのか僕を睨みつけてこう言った。

『オマエのせいで恥ずかしくてこの辺りも歩けない…』と…。

ある日のこと『あきのり、ちょっと来いよ』と兄の部屋に呼ばれ高校の卒アルと一緒に見た。

『こんな時はさ、コイツがバカやって…楽しかった。それで文化祭ん時にさ…楽しかった。』

この写真の子いるだろ？ この子が学年でも人気があった子でさ、俺の事好きだって噂で聞いてさ。

信じてなかったんだけど3日後位にその子がオレに、付き合ってくださいって言ってきてさ…

付き合ってたんだ、かわいかったな…』

『オマエさ、高校って意外と楽しいぞ！ 俺もはじめのうちは高校がつまんなくてさ。』

でも徐々に友達も出来てきて楽しくなっていった。もう少しさ、我慢して通ってみたら？』と兄は言った。

僕の心は冷えきっていた。

『僕は他に楽しい事を見つけるよ』スッと、ありがとうの一言も言わずその場を去った。

兄の気持ちも、凍てついていた僕の心には響かなかった。

フリーター、夢を叶えるためにはまずはアルバイトをしてお金を稼いで。

マンガやイラストレーター、家族はバカにするだろうけど

僕にとってはかけがえのない夢だ。

## ～フリーター～

僕はコンビニのアルバイトを始めた。『マンガ家になる！』そんな夢を抱いて。

職場の人は色々と親切に仕事を教えてくれた。親切で優しくてオモシロイ

お姉さんやお兄さんたちだった。僕はそれだけで心が満たされた。

チーフの方は20才位の女性だけど、とてもかわがってくれた。

よく一緒にアルバイトをしたひとつ上の先輩はスマップの香取慎吾のようなナイスガイで、

地元じゃ有名な不良校に通っていたがすごく優しくて器のデカイ人だった。

なにより初めての、『憧れてのアルバイト生活』はなにもかもが新鮮で面白く、

自由な感じが僕の性に合っていた。

アルバイトにも慣れはじめ、楽しくやっていた

アルバイトから帰ってきたある日の事。両親に呼ばれて部屋に行った。

『お前、将来はどうするんだ？』と、父が質問してきた。

『アルバイトしてお金貯めてマンガ家になるのがオレの夢だ』と答えた。

父親は嘲笑うかのように『バカか。』と僕の言葉を一蹴し、

『お前、そんなんでも将来食っていけると思っているのか？

世間ってのはお前が思っている以上に厳しいんだ。いいか！ よくきけ。

知り合いの大工さんにな！ お前の面倒を見てくれるようお願いしてあるから

明日・6時までに起きて準備しとけよ！』

『明日はムリだ、アルバイトがある。』

『そんなの休めばいいだろ！

とにかく言う事を聞け！ わかったか！』

『…はい。』

こんな厳しい剣幕で何か言われたのは久しぶりだった。

アルバイトを休んでまでして、なんで大工の見習いなんてしなきゃならないんだろうか？

家を出ていく金もない…従うしかない…。それだけ…。

15才でフリーター、全然ありえる話で特別な事じゃない。

大工さんをバカにしているわけじゃないが、オレのやりたい事とは全く違う世界だ。

親が心配した『将来』とは、『食べて行かれない』状況の事だろう。

この世の中努力もなしに這い上がっていける人はいない。

努力する人は自分の得意分野や好きな事、趣味の延長で成功している。

この時アルバイトをはじめた事、マンガ家になろうと決意した事を

家族の誰も応援してはくれなかった。

## ～世間知らずの15才～

大工の見習いを始めた。

親方は当時50才位のパンチパーマをかけたプロレスラー『天龍』みたいなオッサン。

親方の息子が当時21才位、ロングで遊んでそうなチャライ感じの人だった。

Tさんというオジさんは常に酔っぱらったような顔をしていてちょっとオモシロイ感じ。

Dさんというおじいちゃんは優しい大工さん。Dさんの親せきというお兄ちゃん大工さんは当時30半ば位だったろうか？ すごくいい人だった。

15才の坊ちゃんがイキナリ建築現場という『異質』な世界に放り込まれたわけだ。

貧相な身体、あどけなさの残る顔、どこを取っても屈強な男たちの中では浮いた存在だった。

会社の人たちはいつも優しいが、他の職人たちは怖い感じ『ヤクザでしょ？』っていうような

オッサン連中、『ヤンキーでしょ？』っていう若い作業員たち…。僕は坊ちゃん。

でも、負けん気の強い坊ちゃん。プライドが高くて人一倍ガラスの心を持つ優しい少年。

建築現場の異様な感じは正直怖かった。

上大岡の駅ビルの現場は15才の僕にとって地獄絵図、修羅場みたいな場所だった。

そこらかしこで飛び交う『罵声や怒鳴り声』みんな気合が入っている。当然だ。

彼らはそれでメシを食っている『プロ』だからだ。

どんな世界でもそうだ中途半端な人はすぐにはじかれる、勝負しているからだ。

自分自身の心とライバルたちに仕事を奪われぬよう。

(オレはなんでこんな所にいるんだろ？ コレが会社見学だったら半日くらい見て、

すごいなあ…って言って終わるんだろうなあ。でもオレは修行の身、半日で帰れるなんて

あり得ない。1日8時間以上…週に6日…これが何年も、何年も…)





## ～試練～

見習いも数か月経とうか？ という頃『最大の試練が訪れる』

『出張』

この数か月で身も心も疲れ切って、病んでいた。人間不信は募るばかり…

社会への恨み、両親への恨み、姉との不和。

とにかく全てを恨んでいたし『社会をぶち壊したい』そんな思いが常に頭をよぎる…。

泊りがけでの現場作業、それを意味する所は、

『リラックスできる時間は一分たりとも無い』という事。

現場で働く僕にとって『家』というのは唯一『リセット』できる最後の場所だった。

両親や姉との関係性がギクシャクしてたので『家』にいても実際は自分の居場所なんてなかったけど、

地元にいる事が一つの安心感だった事や『好きな音楽』を聴いている時が自分の楽しみ。

友達と『BANDやろうぜ』という雑誌をみながら『俺らもBANDやろ〜か?』なんて言って。

雑誌で紹介されてたカッコイイ『楽器』みて『俺はベースやろうかな』なんてみんな目キラキラさせて。

『夢がたくさんあった。』

でも、

友人を除いた『全ての人間は敵だ』とも強く思っていた。

この思いが一種の念が、『呪い』のように自らの身も心も破壊していく…

『憎しみ、怒り、不信』

当たり前だが『だれも助けてはくれない』助けてほしいと言った記憶もない。

『私は悪魔の使いでしょうか？ 神がいたとしたら、なぜ？ 私にこんなにも試練を与えるのでしょうか?』

もしそれが運命だとしたらあまりにも『不運な人生』を生きているとさえ思った。

産まれてきた事を後悔した、夜たち。。。

## ～人間不信の根～

『生きながらに死んでいる』とはまさにこの時の事を指している。

中三のノイローゼから高校リタイア、強制的に決まった大工修行。

自分の心の内なる悲鳴に気づきながら自分自身ではどうしたらよいのかも解らずにいた。

四六時中、飛び交う罵声や怒鳴り声とは別に、個人的な『陰口・悪口』を浴びせられ続けバカにされ。

純粹だと思っていた自分の心も悪に染まり、もはや何を信じて良いのやら。

この状況下での約一か月にわたる泊りがけの作業。

『行ってみたら意外に楽しかった。』と言える自分になる事を心では望んでいた。

それは中三の時に『高校進学』に希望を抱いていたような『環境の変化による不運からの脱却』を図るような淡い希望。

人間不信という状態になり負の連鎖は『これでもか』というほどに襲ってきた。

どこにいてもなにをしていますが自分以外の他者を疑いの目でみてしまう事。

自分の事を攻撃してくるのではないかと、思ってしまう心のクセみたいなもの。

この不信の極限状態が『戦争』などの悲惨な歴史を繰り返してきた人間の一番の愚かさ。

『人は一人では生きていけない』と正論をいわれても、荒んだ僕の心には全く響かない。

脳内では『アドレナリン』が出っ放しで常に『攻撃体制』が整っている。

そのような状態で働いていた僕は『殺してやりたい』とさえ思った瞬間がいくつもあった。

そして、そこらかしこに置かれている道具がそのまま武器として使える事も。

『キレル』という最悪のトリガーを引いてしまったら『傷害罪』で捕まっていたかもしれない。

アルバイトの大学生たちが15才の僕を幾度となく『バカ』にする発言や態度してきた。

僕の親方は『ムカついたなら殺っちまってもいいぞ。』と僕に言った。

僕は解ってる、

彼らが『クギも打たせてもらえない』し『ボードもまともに運べない』使えない人間だと。

だから特別、気にすることもなかったのに。

『バカにされた』事を仕事で見返すでよかったのに。

そんな心の余裕もない位に心は『怒り』で満ち溢れて、

『面と向かっていってこいや！ ケンカ上等！ 半殺しにしてやるからサ。』

心までも悪に染まり切った自分がいた。

## ～眠れない夜～

その夜、眠れずにCDを聴いていた。

LUNA SEAというバンドとBUCK-TICKという大好きなバンド。

あの頃、バンドブームでみんな『バンド組もう』って、僕は通販でエレキベースを買った。

初心者の入門セットでベース本体以外にいろいろオマケが着いて2万円位の。

初めて持つ憧れのエレキベース。仕事でクタクタで帰ってきて上手く弾けないベースを眺めているだけ。

『チョッパーだ』と遊んで叩いてたらさすがに『うるせー！』と兄貴に叱られたな。

一日死ぬ気で働いて 日当 5000円。

そこらのアルバイトよりも安い給料だけど月に12～3万位の稼ぎがあった。

自分の意志で始めたコンビニのアルバイトは結局は辞めた。



親のいう事が正しいのかは解らないケド、大工の親方や先輩たちも

『このまま大工でやっていったほうがいい』とみんな同じ事言ってた。

迷ったけど、『親方についていこう。』と選択したのは自分の意志。

コンビニのアルバイトはめちゃめちゃ楽しかった。

廃棄の『お弁当やサンドイッチ』を自由に食べていいし、

休憩中は大好きなマンガも事務所に持ち込んで読み放題。

バイトが休みの日でも事務所がたまり場みたいだった当時のコンビニ。

優しいお兄さんやお姉さんに『マンガ家になりたい』と夢を言ったら

『すごいじゃん！頑張れ～！夢叶えよう』

家族にも『反対された夢』をバイト先みんなは真剣に応援してくれた。

その時は『大工の見習いの話し』がくるなんて夢にも思わず、

ただ『嫌々だけど仕方なく』父親の言うとおりに従っただけ。

コンビニの店長に『大工見習い』の話しをしに行った時にどこかで

『反対してくれるのではないか?』と思っていた自分がいた事も懐かしい。僕の期待とは裏腹に、

『学校辞めてフリーターもいいけど将来的には大工の見習いやってたほうが安心だね！頑張れ!』

急な話で『お給料は出せない』と言われたけど

『たくさん経験させて頂いて感謝しています。ありがとうございました』と告げて店を出た。

大工の見習いは朝は早く帰りも遅い。

週に一度あるか？ ないか？ の休日も作業着を買いに行ったり道具を買いに行ったり忙しい。

当たり前だが、最初は特別なにができたという訳ではない。

掃除や整理整頓をし親方や先輩の手元をやるのが精一杯。

『ウエス持ってこい!』『鉄砲のクギ持ってこい!』『ラジエットくれ!』

聞きなれない名前の道具ばかりで覚えるのが大変だった。

メモって覚えて、言われた道具をすぐに持って行く事からの仕事。

掃除もただやみくもにほうきで掃けばいいんじゃない事を知った。

一仕事終わった後に『道具』をかたずけたり『掃除』をする理由も教わった。

そのうちに『お前もクギ打ってみるか?』と言われ、試しに打ってみたら自分の手を叩いてしまった。

『バカだな、いいかクギってのはこうやって打つんだ』と見本をみせてくれた。

親方や先輩のようにはうまく打てないけど、やってるうちにだんだん正確に打てるようになった。

『橋本、この樽木を斬ってくれよ』

電動の丸ノコなんて当初は怖くて使えなかった。

ノコギリで一生懸命に斬ろうとするけど全然斬れなくて。

『橋本、ノコギリってのは引く時だけ力を入れるんだ。足でしっかり木を抑えてな。手や腕の力だけで斬ろうとするから疲れるんだ。腰を使って弾く時に体重を上手く乗せてみな。』

初めて切った樽木は自分の書いた線よりもだいぶ曲がってしまった。真っ直ぐきれなかった。

## ～鏡に映る自分～

カンナでの削り方、水平の出し方、レーザーの使い方、電動工具の正しい使い方

一通り道具の使い方を教わった。

そのうちに、ボードの貼り方をやらせてもらえるようになって初めて自分が仕事をしていると感じた。

まだまだ遅いし汚い貼り方だけど『ボード張りなら一人でできるんだ！』って。

任せてもらえるようになるまでは、資材の搬入、掃除、手元、

探してもやる事がなければ『とにかく掃除してろ』と。

『目で盗め！ いつか教えてくれるだろうと思うな！ 目で見盗んで誰もいない所でこっそり練習して出来るようになるんだ。そして、自らの意志でやらせて下さいと言え！ 仕事は与えられるものじゃない。お前がどんどん奪っていくんだ！』

初めてお給料を貰った日の事。

隣り町の居酒屋で会社の人みんなが集まって。

15才の僕は初めて飲むビールの美味しさに感動して。自分のペースなんて知らないものだから周りのペースに合わせてガンガン調子こいて飲んでたら急に気持ち悪くなって。。

立った瞬間、大げさにリバースしちゃって、店にも周りのお客さんにも迷惑かけた。

その時、初めて手渡された給料。

『僕はなにもしてないので。。』って言ったのに

『弁当代にでもしろ』って、言って。

作業着買ったなあ。そのお金で。翌月にはエレキベースも買えたよな。弾く時間も気力もないけど。。

そんな事が『走馬灯』のようにグルグルと頭ん中を駆け巡った夜。

ふと洗面所に立った。

(鏡に映るこの歪んだ顔の男はダレダ??)

今にも死にそうな顔でこっちを見ている。

(ああ、これはおれか?)

変わり果てたその死に顔はオレの知っているオレではなかった。

『お前は誰だ? どっからきた??』心の中でそうつぶやいた。

この鏡に映る変わり果てた自分の顔や姿が自分自身である事を受け入れられなかった。

自然と涙があふれ出てきた。目から零れ落ちる生ぬるい雫がぼたぼたと床に落ちて神経はまるで通っていないかのように思えて頬を強く抓った。これは現実だ。

『まるで生きながらにして死んでいるような人の顔だな。生きているのか? 死んでいるのか? ももうよく解らない。俺っていう人間はもうとっくに死んでしまったみたいダネ。』

洗面所の鏡に映る自分にそう自分に語り掛けた。

ひょっとしたら神様が憐れな自分を見て魔法をかけてくれるかもしれない。

『もし、願いが叶うなら、輝いていたあの頃に戻してくれよ神様。』

変わり果てた自分を受け入れた時、

産まれて初めて『神や仏』にすぎる思いで祈った。

幼き日に、おばあちゃんが祈っていた『魔法の呪文』の事を思い出しながら。。

缶コーヒー片手にベランダに出てタバコに火を着けた。

ふと見上げた夜空は不思議な位に星が瞬き綺麗に見えた。

太陽に見放されたと思った僕は

この綺麗な月夜が永遠の世界だったらいいのにと

星星や月にひっそりと語りかけた。



## ～変わらぬ朝～

気がつけば、いつの間にか寝ていた。

窓から差し込む光が今日はやけに目に染みる。

おばあちゃんが教えてくれたように祈ってみた。

ケド、この世に早々おこるキセキなんてあるわけないか。

安易に神様や仏様だとかは信じないようになった。

昨夜、鏡に映る自分の醜さをみて完全に滅入ってしまった。

現場の窓ガラスに映る自分の姿を見て『化け物だ』とさえ思った。

なぜだろう？ 仕事にも全然身が入らない。風邪でも引いたのか？

頭はズキズキ痛むし寒気もするし、ふわふわして立っているのが不思議な感覚だ。

注意力も散漫で、いつもの何十倍も親方に怒られるんだけど、

打っても打っても狙ったようにクギが入っていかないや。。

親方がそんなオレの様子をみていつもよりも厳しい口調で怒鳴って怒ってる。

何度か『大丈夫か?』と聞かれた。

『大丈夫です。』と答えるオレ。

しまいにゃ自分の指が血まみれになる位に打っても打っても『なんでだ? いつも通りにやりゃいいのに』全然だめだ。こんな調子じゃ迷惑かけるだけなのも解ってる『帰りたい』いや『帰れない』

本当は自分でも一番よく解っている。

心も身体もとっくに限界点を超えている事も。

そして、過去に戻りたいと思ってももう後戻りも出来ない事も。

気の抜けたような僕の態度を親方は『気合や根性が足りないというだろう。』

でも、そうじゃない。気合や根性の話しなら今日まで俺はオレなりに耐えて生きてきた。

仕事がつまらないわけでもない。勉強が嫌いなわけでもない。

『なぜ？ どうして？』過去ばかり振り返ってばかりの自分。過去ばかり気にしている自分。

きっと未来に明るい希望を描けなかったから後ろを振り返ってばかりの自分。

きっと自分のトラウマから逃げる事でしか自分を保っていられなかったのだろう。

みんなから愛されて育ち、特別不自由もなく、スポーツができて人気者としてすごした小学校時代。

いつからだろう？

あの頃と同じ景色や街並みも変わらないのに

『なにかが違う』『変な感じだ』『居心地がどんどん悪くなる感じがする』

そう、年を重ねる事に『変わらないはずのなにかが変わる』

自分では意図しない方向にどんどん流されていくのが運命だとしたら仕方がないと諦めた。

親方が気の抜けたような僕を見ていよいよこう言った。

『お前、いい加減にしろ！ ヤル気がないなら今すぐ帰れ！』

僕は少し唇を噛みしめて血まみれの自分の左手を見た。

矢継ぎ早に親方が言った。

『どーすんだ？ やるのか？ 休みたいのか？ 帰るのか？ はっきり言わなきゃわかんね～ぞっ！』

その言葉はもったもた。言われて当然だ。

『ひどく体調が悪いので東京かえります。』

そう伝えるのがやっとだった。

## ～助手席で眺めた風景～

先輩が運転する車の助手席で僕は流れゆく景色をぼんやり眺めていた。

カーステレオから流れる音楽は『流行りのJ POP』

大好きな夏の匂いを音からも感じられた。

『海』にはあまり縁のない自分だけど、

幼き日の沖縄での海の記憶がずっと忘れられずにいるのだろう。

母の故郷である沖縄の南国気質が僕のDNAにも流れている事をふと思い出す。

無条件の優しさをくれた母親の愛の中で、

僕自身もただ『人に優しく』ある事だけが最大の長所だと自覚して生きてきた。

沖縄でみたあの透き通るような海。

淡いブルーのグラデーションが地平線へと続き、だんだんと目の覚めるような青。

それを目で追いかけた先に見えた島々。

『どんな人たちが暮らしているのだろう？』

夜にはどこからともなく人が集まり大人数でバーベキューや花火大会。

見たこともないほどの満天の星空をみあげた瞬間の感動を今でも忘れない。

都会で生まれ育ち『優しさ』は『弱さ』と同等に扱われ、

『正直』よりも『器用に生きる』事が社会のルール。

誰かが敷いた『レール』の上をひたすら歩き続け、

気がつけば『僕らはどこへ？』

大好きなはずの季節にただただ『怯えて過ごした15の夏』

『この気持ち』や『苦しい思い』は誰にも言ってはいけないのだ。

『夢や希望』を潰されて『不自由』で『縛られて』生きる位なら

『生きている意味も喜びも今はなにも感じない。』

ふと気がつけば見覚えのある景色。

変わらないはずの街並が変わってしまった『何か』に不安を覚えた。

変わってしまったのは『自分の心』だとは気がつきもしない。

家の前まで着くと力なく『ありがとうございました』と先輩にお礼言い、

最後の気力を振り絞って2Fまでの階段を登った。

いつもよりもちょっぴり贅沢な夕飯が用意されていた事にも素直に感謝できない自分がいた。

布団に横たわり真っ白な天井を見つめながらいろいろな事を考えていた。

『もうしばらくはなにも考えないようにしよう。なにもできる気がしない。倒れるまで頑張ったんだからもうかんべんしてくれよ。今は誰にも会いたくないし一人になりたい。』

『劣等感』『コンプレックスの塊』『対人恐怖症』

外に行くと『心臓が破裂しそうな位の動悸』がして倒れそうだった。

そんな事を誰かに話しても『無駄』である事を悟ってしまった。

『気合や根性で治るなら医者なんてこの世に必要ないだろう。』

自分自身も自分について何一つわからなかったけど、

人の苦しみや悲しみを誰よりも理解できる事だけが生きている意味のように思えた。

苦しみの中で『みんなが笑顔で暮らせる世界』を夢みてた。

でも、

自分がこの殻を乗り越えるにはとても『臆病』すぎて、



だから

笑顔を取り戻す時間を与えてくれたのかもしれない。

人生を考えるチャンスを与えてくれたのかもしれない。

この日から引きこもりの生活が始まった。

## ～引きこもりの物語～

ボロボロになった心はいくら寝てもちっとも癒えやしない。

『心臓病か?』と思うほどの強い動悸が時間を問わずに襲ってくる。

内科で診てもらっても『どこも異常なし』と言って帰されるだけ。

『病気』でもない『この目には見えない症状』をいくら周囲に訴えても解決策なんてなかった。

今思えば、

『心療内科』の専門領域である事がはっきり解るのに

当時はたんなる『怠け病』とか『臆病』と言われてバカにされた。

『誤解』と『偏見』だらけの社会で生きていくには情報も知識も足りなかった。

理解者もない状況で『自分の内なる心』と向き合い『偏見』と戦った青春時代。

『笑顔で幸せに暮らす』為に『難しい理由などいらない』はず。

でも当時の僕にとっては、

なかなか解けない難しいパズルのピースを埋めていくような『地道な戦い』

本来は『ノーテンキ』といえるほど『ポジティブ』過ぎる僕は

意外にも『孤独には強い』のが長所でもある。

『人とは違う人生を歩んでいる』事を特別だとは思わなかった。

僕の人生の教科書は『マンガ』だった。

大抵の事は『マンガ』から教わった。

『いろんな人間がいてもいいんだ』と思えた事。

『いろんな人生があってオモシロイ』と感じた事。

そして『希望だけは絶対捨てちゃいけない』んだと心に刻んだ。

大工の給料をコツコツ貯めたお金で『古本屋』で『マンガ』を買う事が楽しみだった。

外に出る事が難しい状況でも『好きな事の為』なら自分なりに工夫して出かけた。

人目を忍んで『深夜』にでかけコンビニで『少年マガジン』をGETしたり。

暗闇の住人である僕は『夜に紛れて生きる』少年だった。

『アウトロー』を演じる為に『人と違う』を追求したけど

『人が怖かった』自分の心に『仮面』をかけていただけ。

『何かを手放す』代わりに『何かを得る』のだとしたら

『大きな夢を叶える事』こそが生きる原動力だった。

『人の為になにか出来たら』と『なにかができるか?』を模索する日々。



## ～祖母のお世話係～

世間体を気にする父親や姉が『引きこもり』について口うるさく言わなかったのは

『痴呆症になった祖母』のお世話という名目があったからかもしれない。

僕が中学にあがる位からすでに祖母の痴呆症の兆候を感じてたけど、

うちの家族は『人の変化』にめっぼう疎いので『なにか事件が起こらないと』問題にはしない。

祖母の痴呆症が進むと

『火を付けた事を忘れてその場を離れてしまう』

『目を放すと一人ででかけて迷子になる』

特に『火の元』だけはウチだけでなく周りにも迷惑をかけるから絶対に火事をおこしちゃいけない。

なので、『特別なもしてないお前がお世話するのが仕事だ』と父から言われた。

大工見習いを辞めてから外におもうように出れない状態だった僕も

何度か勇気持って『アルバイト』にチャレンジしたけど続かなくて全然ダメだった。

いよいよもってして『自分もどうしたらよいか?』『どうして生きていこうか?』と

できない自分自身の存在価値さえ見失っていた。

『おばあちゃんのお世話』といっても僕にたいした事ができたわけではない。

おばあちゃんの食事を作ったり困った時に話しかけたりしていただけ。

おばあちゃんは神様や仏様に『お祈り』することも忘れてしまった。

家族の中で唯一『信仰心』のあったおばあちゃん。

両親も兄弟もお経の唱え方を知らない。

僕に至っては『法事やお墓参り』にも参加しない。

親族とは『関係ない』とも思ってた罰あたり人間。

それでもおばあちゃんは僕の事を覚えていて優しくしてくれた。

おばあちゃんの桐タンスに閉まってあった『幼き日の僕の写真』

引きこもりでも人間不信でも、

心の奥に良心を閉まって大事に護れたのは

家族の愛をたくさん貰って生きてきたから。

無関心に思えて放置されているように思えて、

反発もした酷い言葉も言った。

けど、

『信じて支えていてくれた家族がいた』から



自分なりに悩みながら迷いながらも『希望』を持ち続けた。

幸運の星の下に産まれている事には

全く気がつきもしないけど、

『使命多き人生』だと自覚するための『試練』

『人の為に尽くしなさいよ』というメッセージ。

## ～友人たちとエレキギター～

BOOWYが大好きだというギタリスト・『タカロック君』との出会い。

ケンケンという小学校からの同級生からタカロックを紹介してもらった。

普段引きこもってる僕の友達の輪はほとんど小学校からの繋がりで、

学校に通ってない自分に新しい友達ができるとは全く予想してなかった。

(しかも家に引きこもってるしね(笑))

バンドがやりたくて紹介してもらったタカロック君は予想に反して『すごくいい奴だ』

彼は僕らよりも早くに『エレキギター』を始めたのでめっちゃめっちゃギターが上手い。

偉ぶった様子も微塵も感じない。

『本当にイイ奴』そして『なぜか話しが合う』のと『なぜか他人という気がしない』

『謙虚に見えて実はプライドの高い所』とかロックな『反骨精神』や

『意外に毒舌』『意外にロマンティスト』『意外に優しい』という『意外性』が自分そっくり。

彼と話すとはどっちからともなく、

『いや～奇遇だね実は俺も！』『え？ マジで実は俺も！』

『前世からの繋がりかなにかかね？』

『実は俺もハシには初対面から前世的なの感じた！』

そしてタカロックとは、

前世よりももっと近い、

『幼稚園の時の友達だった』事が発覚したとゆ～。(笑)

(雰囲気が変わっててお互い気がつきませんでした。)

『ソウルメイト』って不思議な巡り合わせもあるものだ。

通称・『ボス』という友達は洋モノのロックを俺らに教えてくれた。

自分から『ボスと呼べ!』と言うのでみんな『ボス』と呼んでた。

ケンケンもタカロックもボスも『みんなギター弾きだった』

ので『なんちゃってベーシスト』の僕はよく声を掛けてもらった。

けど基本『引きこもり』の僕は一人で練習する時間が長い。

リズム命の『エレキベース』はバンドでこそ『華』

一人で黙々やっても面白味が感じられなくなった。

弾けて歌える『ギター』に転向しようとケンケンから安価でギターを譲って貰った。

そしてタカロックを『先生』と呼びエレキギターのイロハを教えて貰った。

音源などはMDやテープにコピーさせて貰ったり譜面も仲間内で共有し合った。

『学校に通ってない事』や『普段引きこもっている事』なんかには一切気にする仲ではない。

『バンド』っていう共通の話題があればみんな『仲間』であり『ライバル』

そんな友達と出会えた事が『本当の財産』で『宝物のように大事』だ。

引きこもりの僕は兄貴のオーディオでガンガン音出して『狂ったように』弾いて唄って。

もう夢中になってガムシャラにやった。

下手でもいい。なんでもいい。

カッコ悪くたって。

引きこもってたって。

何を言われてもいい。

『だって俺にはこれしかないからさ！』



～毛布に包まりながら～

『マンガを読む』『ギターを弾く』『家族の料理を作る』

『ちょっと最近調子いいじゃん自分』と『アルバイトにチャレンジしてみる』

が『仔犬のように逃げるように辞める』

そして『引きこもる』

この繰り返し繰り返し。

そして『毛布に包まりながら』の『一人反省会』

自分にはなぜ『正義のヒーロー』が現れなかったのか?? を真剣に考えてみた。

高校不登校になった時はどうだろう？

『そういえば正義のヒーローはちゃんといたな。』

定番の『正義に燃える熱い熱血の男子！？』ではなく、

『芯の通った可愛い女子』が『小ギャル嫌いの自分』を助けてくれようとしてくれたな。

『私が友達になってあげるから学校にきて』と伝言をくれた。

同じクラスだったその子とは席が遠いから話した事はなかったけど

可愛い子だなあと入学式からずっと気になってたから覚えている。

嬉しかったけど『嫌われ者に情け無用だ』と変に突っぱねたのはバカな自分だ。

(この世間知らずめ！世の中そうそうチャンスなどないと言うのに本当にバカ野郎！泣)

フリーターの時は？

『そう？ 私は橋本くんはジャニーズ顔だと思うよ。じゃ今度私の友達呼んで一緒に飲もう！』

『合コンとかうるさい場所は苦手だなあ～。行けたら行きますね。』



(贅沢言ってんじゃねえー。恋愛したいなら参加しとけ！ 世間知らずめ！)

恋愛至上主義を徹底的に植え付けられて育った僕たちの世代は

『素敵な恋愛』イコール『幸せ』というのが普通。

『現実と仮想現実』を何度も行ったり来たり。

『目に見えるモノが全てではない』事を。

『信じる人にだけキセキが起きる』事も。

そして本当は『幸せに暮らしたい』だけで、

『笑顔で生きていたいただけ。』

毛布に包まって

『心まで風邪ひかない様に大事に温めている。』

温かいコーヒーを飲んで

『お前もけっこう辛かったんだな。』

人気のない公園で友人と語ってみたり。

そこに『人間』がいるから摩擦も生まれるけど、

摩擦がなかったら凍え死んでしまうから、

『まっ、元気だせよ！』

『話し聴いてくれて悪いな。ありがと！』

と言って『生きている日常』自体が

『キセキ』だと思っからさ。

## ～当時のアルバイト・16才から18才まで～

引きこもり当初、大工見習いで得た給料で貯金を崩しマンガを買っていた。

貯金が目減りしてくると『アルバイトせなアカン』と思ってきた。

でも、対人恐怖や人間不信の根が深かったのでアルバイトも長続きしなかった。

18才になるとアルバイトの選択肢が一気に増えたので

一念発起し『パン屋のアルバイト』を始めた。

ちょっと洒落た雰囲気や客層も『落ち着いた感じの大人な女性』がメイン。

『ここなら働きやすそうだ！』と速攻電話し面接の次の朝には働いていた。

朝のオープンから一時間半位は『自分が一番苦手な女子高生』で店が埋め尽くされる。

(なぜ?? 女子高が近いんか?? うっかりリサーチミスだ。)

8時間勤務でも毎朝毎朝その時間だけが本当に憂うつだった。

家族でやってるパン屋さんで『奥さま』は僕の事をかばうように、

『橋本君は仕込みやって。朝のレジは私一人で充分だからね』と言ってくれた。

(レジは2台ある。朝はほとんど奥さまに甘えて僕はウラ作業していた。)

後々に『レジ』のことで店長と奥さんがスゲー夫婦ケンカを始めた。

奥さまはオレをかばって『レジなんて一人でいいのよ!』と。

その日、昼休憩から戻ってきたら、

『お帰り』と笑顔で言った奥さまだったけど

左頬がアザになる位に腫れて少しナミダ目だった。

(店長が殴ったんだな。オレのせいだ。なんて責任取ればよいのか?)

僕の事を自分の息子のように可愛がってくれた奥さま。

朝5時に出勤すると、

『橋本君の大好きなエビとタマゴのサンドイッチとキノコのキッシュとっておいたよ!』

エレキギターをやっている事を言ったら、

『すごーい! お店にもってきて練習しなよ! 事務所に一台置いてけば?』

大雪が降った日には

『橋本君帰れる? いつでも泊まっていけるようにソファベッド買おうかしら。』

僕と同学年の娘と2つしたの娘がいるのだけど、『本当は男の子が一人欲しかったの』と。

僕がアルバイトをするようになってからは、娘さんに僕の話しばかりしていたらしい。

娘さんは嬉しそうに話す母をみて

『まるで本当の息子がきたみたいで良かったね!』と言ったみたいだ。

ソファーベッドの件は本気で買おうとしていたらしいが、

年頃の娘さん二人もいて自分が泊まったらさすがに悪いとやんわりお断りした。

僕はあの大工の時に『人間不信』になった男だけど、

もしも、もっと違う形でこの家族に出逢えてたらもっと人生違っていたかな？ って思った。

『責任の取り方』は『辞める』しか頭がなかった自分。

『立つ鳥跡を濁さず』

僕はアルバイトを辞める前に友達を紹介して辞めた。

『新しい子が慣れるまで橋本くんがその子に仕事を教えてくれるなら助かるし、もう少しだけガマンして一緒に働こうね』

奥さまはそう言って僕のワガママを受け入れて下さった。

一週間かけて友人に仕事を引き継いで『役目』は終わった。

僕は思った。『オレなんかよりノブがこの店で働いてくれたほうが全然いい。オレはまだ昔に負った心のキズが完全には癒えていないし。迷惑もかけてしまうから。』

少しは成長できたのかな？ ちょっとは役に立ったのかな？

友人以外で『ありがとう』と言えたのは、

この数年間で久しぶりか、もしくは初めての事だった。

～なんくるないさ～命が宝（ぬちどうたから）

超絶ポジティブな言葉。

『なんくるないさ～』は、

沖縄出身の母が多用するポジティブワード。

『神々の住む島』と詠われる『琉球王国』（現・沖縄県）は独立した国家だったらしい。

同じ日本であるとは思えない『オリエンタルで不思議な島』という印象。

困難があっても『なんくるないさ～』と笑い飛ばして穏やかに陽気に生きる島人。

沖縄から東京に嫁いだ母もまた『命こそ宝』が信条。

『命まで取られる訳でもないからさ～。なんくるないさ～』

1999年。僕が19歳の年。



友人たちが就職や大学に進学していくとアルバイトも満足に出来なかった自分は

良好な交友関係も保てなくなってしまい『完全に家に引きこもるようになった』

外でうまくやっていく自信を失った僕は

『家族のご飯を美味しく作る』事だけが生きが이었다。

未来に繋がっているような実感はなく

ただできる事を精一杯やっていた。

『生きるってどういう事だろ?』

『どこに行けば? なにをすれば?』

元気で笑顔で幸せに暮らせていけるのだろうか?

母は僕の心の内を全てを知っているかのように、

悟りをひらいたようなような確信をこめて、

『なんくるないさ〜』と励ましてくれた。

(必ず道は開けるんだよ！ 自分を信じて生きていく。今は解らなくとも意味があるから。  
命こそ宝。)

『なんくるないさ〜』

は不思議な言葉だ。

超絶ポジティブな言葉だ。

なぜなら琉球の歴史は

それはそれは辛くて悲しい歴史だからだ。

僕なんか『辛い』というレベルを遥かに超えた

『最後の地上戦』や『ひめゆりの塔』の悲痛な歴史。

それでも

いつでも明るく前向きに

『なんくるないさ〜』と言える強さ。

だれも責める事もなく

だれが悪いと決めるでもなく

『あるがまま』を受け入れ

神様の与えた試練だと

困難に立ち向かっていく。

『許すこと』と『許されること』

物事や言葉に見え隠れする『陰』と『陽』

『ポジティブ』な言葉の背景にみえた『陰』の部分。

悲しみ深きゆえに

『命こそ宝～ぬちどうたから～』とは島人の教え。

母から僕に伝わる大事な教え。

殺伐とした時代に生まれ家に引きこもった青春時代の心の痛みと引き換えに。

『命の大切さを』どこかで苦しむキミに伝えたくて。『僕は生きる。』

臆病な自分の心に小さな勇気の種を植えた日。

## ～苦手克服シリーズ・水泳編～

引きこもりの挑戦。『ジムに通うか！』ふと思いついたミッション(笑)

当然『通うお金もない』けど、作戦は着々と練られていった。

辛い・苦しい・抜け出したい。

どうすれば？ なにをすれば？ 自信が持てるんだろ？

『はっ、そうだ！ 俺はもともとスポーツ大好き人間だったじゃないか？ あの時輝いていたのはスポーツをやっていたからだ。』

今、目の前に敵がいたとする。俺はこんな貧相な身体で戦えるだろうか？ いや！ 負けるだろう。

オレは争いが嫌いだ。だが、不屈の精神を養うには身体を鍛えるしかないように思う。

父親だって言っていた『学がねえなら身体で稼ぐしかねえだろ！』と。

最後のあがきでさ、これでダメなら死んでもいいくらいの覚悟でやってやろうじゃん！

『思い立ったが吉日』早速パンフレットを取りに行った。

(高けえ！ 月一万もすんの？ もっと安くしろよなあ。だれかこの情熱を買ってくれるか？)

ダメ元で母に『情熱を語ってみた。』

『あきのり、あんたはやればできる子だとお母さんは信じているよ。勉強もギターもイラストも続けてればいつか日の目を浴びる時がくるさ～。人間だれでも一緒さあ。頑張りなさい。』

(世間一般なら大学に通っている年頃。学費を出すと思えば全然問題ないさ。)

そう言って母は費用を負担してくれた。

『これでダメなら仕方ない。自分の全力を出して身体も心も強くなる！』そう決意した。

『水泳しかない！ 人間だれでもそんな変わらんなら俺だって泳げるはずだ。』

根っからの『カナズチ君』のぼくは全く泳げないことで有名。

水泳やろうと思ったのは『あるスイマーの挑戦』に心から感動したからである。



## ～シドニーオリンピックに重ねた夢～

僕は『向こう見ず』な世間知らず。そして純粋すぎるのか？

『夢はでっかく持っていた。』

泳げもしないのに『競泳でオリンピックにでる！』と。

(せめて他の競技でもいいのではないか？ クレー射撃とかさあ。苦笑。)

2000年のシドニーオリンピック直前。

NHKの『トップランナー』という旬な有名人の半生を紹介する番組を毎週楽しみに見  
ていた。

その時のゲストが『オリンピックスイマー』の萩原智子選手。

萩原選手は僕らと同世代で同じ年。親近感も湧き、とても興味深く拝見させて頂いた。

彼女が水泳をはじめたきっかけは



『彼女が幼少期の頃。海で溺れかけた時、このままでは水に対してトラウマとして生きるのではないかと心配した父親がスイミングスクールに通わせた』というハートフルな家族のエピソード。

(俺もプールの授業で溺れかけたけどやっぱトラウマで生きてきたな。)

彼女は競泳選手として頭角を現し始めた小学生時代からいつも傍で応援してくれる家族と共に戦ってきた。

萩原選手の素顔はおっとりした性格で競うのも苦手な女子学生。

さまざまな困難や壁にぶち当たりながらも、『コーチや仲間、友人たちの励まし』で挑戦し続けてこれた。

『どんな時もどんな自分でも受け入れ支えてくれた仲間や家族のお蔭です。』と言った萩原選手の目はとても純粋でキレイな眼差しでキラキラと輝いていた。

シドニーオリンピックでメダルの最有力候補と目されていた萩原選手の挑戦は『4位』という結果に終わったのだけど、

同じレースで『3位』に入った仲間に真っ先に祝福しに行く萩原選手の姿をみて

(なんて純粋で真っ直ぐな人なのだろう！ 素敵すぎる)と僕は『萩原選手』の人間性に心打たれた。

僕もなにかに挑戦しなきゃいけない。僕と同じ年の選手がこんなに頑張っているんだ。

ずっと苦手だった水泳をやってみたい。泳ぐことの楽しさを体験してみたい。

憧れのスイマーに一歩でも二歩でも近づくような挑戦がしたい！と思った。

その極みが『オリンピックに出る』という(笑)。『熱い夢』

なんであれ

『若者は若者らしくデッカー夢を持っている』がちょうどいい。

ハジかれようがバカにされようが『挑戦する心』は若者の専売特許だ。

学生時代もずっと泳げなかった自分が

20歳にもなって初めて『プールの楽しさ』を知ったのだからラッキーだ！

『チャレンジ』して『失敗』してもそれはそれで『経験』なんだ。

飽きっぽくても『色々やってる事』が『チャンスに変わる』から。

それぞれのスタイルでそれぞれの『テーマ』を持って生きる事が必要な時代だから。

20年もの間、

死ぬほど水嫌いだったけど。

泳げるようになったらプールが楽しくて。

『大の苦手』が『大好き』に塗り替えられた世界は

『心から湧き上がる感動』と共に進む勇気を与えてくれた。

『挑戦する勇気をくれた偉大なスイマーに心から感謝。』



## 第5章



## ～革命のギタリスト・再会～

成人式も終わり、冬から春へ。季節は巡る。

ロック好きな僕が開放感を味わえる大好きな夏の日。

僕の運命を動かす再会はなんの予告もなしに訪れた。

男の名は 新城 隆則 (しんじょう たかのり)。小学校時代からの同級生だ。

数年振りの再会は『アポなし突撃訪問』という。昭和っぽくて逆に新鮮に感じた。

久しぶりに見た彼は『物凄いオーラを放っていた。』

僕は靈感などないけど『本物』だと直感的に感じ取った。

『ハシ！ 久しぶり！ 元気？？ ハシさぁ、ギターやってるんだって？？』

『うん。やってるっても独学で好きなようにやってるよ。ノーリーは??』

『実は最近ギター初めてさ！もし時間あったら今からスタジオ行かない??』

その誘いが突然すぎて一瞬悩んだ。

けど、行けばなにかいい事ありそうだと自分の直感に従う事にした。

意外にもミュージシャンや芸術家の多い土地柄。

歩いてすぐに音楽スタジオがあるのはバンドキッズの僕らにゃラッキーだ。

2名までは個人練習扱いで一時間500円というのもギタリストの財布に優しい。

スタジオに入ると慣れたように音を作っていく新城。

オレは最近サボってたのがバレバレな位に音作りに悪戦苦闘。

先に音作りを終えた彼が指慣らしで引き始めた。



(最高にカッコいいじゃん！ ウィスキーのCMの曲か??)

『ねえそれなんて曲?? ウィスキーのCMっぽいね。』

『TAKE FIVE って曲。最近 JAZZ にハマっててさ。』

(え? JAZZ?? 大人が聴く音楽じゃね?? でも、カッコいいな!)

『ねえ、セッションしようよ!』と彼が言った。

『え? JAMるの? アドリブで?? 俺、コピーバンドしかやった事ないけど。。』

『簡単に言うとキーがCだったらドレミファソラシド弾けばいいよ。

じゃあ F G Am Am で伴奏してお互いに回していこう!』

『え? うん解った。F G Am Am でアドリブは。ドレミを適当にやってみるよ。』

愛機である JAZZ マスターのセレクターをフロントにセットしボリュームトーンを絞った。

バカでかいマーシャルのアンプから枯れたような独特の音。いつもの聴きなれた自分の音。

『1. 2. 3. 4.』

～F G Am Am～ブルージーなコード進行をループするようにギターから紡ぐ音。

(じゃ入るよ)と目で合図した新城。

彼はまるで管楽器を弾いているかのような、なめらかなで自在なメロディーを僕の伴奏に重ねていく。

少々荒めの僕の伴奏に、少しうっとりする位の優しいメロディー。

指板をフルに使い下がったり上がったり音の強弱や抑揚が味を出す。

気がつけば何とも言えない『音の空間』に酔っていた僕。

伴奏してるだけなのに自分が上手くなったような錯覚に陥った僕は

『ブレイク』を入れてみたり『アルペジオ』で弾いてみたり～

(あっ!)と、僕の練習不足の左腕が攀った。

『痛ってえ～！ ごめんごめん(笑)』

ノーリーめっちゃカッコいいじゃん！ 俺にも JAZZ 教えてよ！』

彼は屈託のない、満面の笑みでそれを了承した。

彼との再会からまだ数時間しか経っていないというのに、

僕は目の前にいる 新城 という人間にすっかり魅了されてしまったようだ。

なにかが大きく動き出そうとしている。

彼との再会は希望に満ち溢れたものとなった。

～新城くんと橋本くん～

新城くんは父親も母親も『沖縄出身』の東京育ち。

僕は父親が東京で母親が『沖縄出身』の東京育ち。

僕らは『心のふるさは沖縄だ』という『同志』のような間柄になった。

純粹でポジティブで『思い立ったら即行動』の彼の生き方は遅しくもあり『超個人的』である。

こもりがちな僕を『グイグイ引っ張って』くれる大切な友達だ。

『今から路上に練習いこうぜ！』

とこんな感じで毎日のように声をかけてくれる。

とある日の事。

いつものように路上練習の待ち合わせの時間に彼の家の近くで待っていた。

『ゴメン、待った?』と登場した彼の姿をみて、

僕は飲んでたコーヒーを吹いてしまう位爆笑した。

むき出しのままアコギのネックを右手で持ちバットみてえに肩にかけるスタイル。

(ギターケースにいれないか?? こんなワイルドなギタリスト初めてみた!)

そのスタイルのまま自転車に乗った。片手運転でママチャリをこぐ姿。

むき出しのアコギが風を一身に受け。時折、自転車ごと倒れそうになったり(笑)

通りゆく人の視線も一身に集めている。それでも彼は堂々としている。

(逆にギターケースに入れて背負ってるオレのほうが恥ずかしいくらいだ。)

地元駅周辺での路上練習。

『路上アーティストみたいにさ、帽子を逆さにして置いたら誰か金入れてくれるかなあ。』

『そーだね。飯代くらいくれてもいいよな〜。』

と冗談言ったら50才前後位の酔っ払った夫婦が俺らの前で足を止めた。

『ねえ、サザンのTUNAMI うたえる？』と酔っ払い夫人が話しかけてきた。

彼は『うたえません』と、即答した。

『じゃ、福山雅治の桜坂は？』

『うたえません。僕らはウタはやりません。』

『じゃ、得意なのやってよ』と食い下がる夫人。

『どうする？』と彼に聞いた。『アレでいこうぜ！』

まだ完全に弾けるわけではない

『マイフェイバリットシングス』『世界の車窓から〜オープニング〜』

仕方ないから僕は『1. 2. 3. 4』伴奏を弾きはじめた。

地下通路のよく響くこと。彼がメロディーをのせるとなんかイイな。

解からないコードを適当にごまかし場の雰囲気でもやりきった。

『これでご飯でも食べて。頑張ってるね!』と夫人は帽子に1000円を入れてくれた。

そのお金で牛丼をがつつくように食ってまた地下通路へ。

次に足を止めてくれたのは30才位のボンバヘッドでファンキーなお兄い。

『キミたちアコギのD i oなの?』

そんな会話の流れから

『俺らのイベントで演ってくれない?』という話しになり。

『当日は何を持っていけばいいですか?』と新城が聞くと

『その身二つとギターがありゃいい。後はそのアツいハートも忘れずに持ってきてくれ。』

そう言い残してボンバヘッドお兄いは夜の歓楽街へと消えて行った。

お兄いと約束の日。

急遽結成した『ペーパーズ』の新城と僕で2曲演奏させてもらった。

演奏後。MCが『ペーパーブラザーズ！ ありがとう！』と。

いつの間に?? 『兄弟になったんだ?』

『俺らはペーパーだけど兄弟ではない。』 帰り道。二人で大爆笑した。

(人前で演奏するってのも度胸だなあ。ドキドキして指が動かなかったよ。)



## ～ギターがくれた出会い～

新城との再会以降、彼に触発されるように『JAZZ』がキーワードとなった。

僕が弱気な発言をすると『マイルス・デイビスに成りたくないのか?』と彼は鼓舞する。

(マイルス・デイビスはJAZZの王様。マイルスはアマチュア時代にいつでもチャンスを物にできるようにトランペットを持ち歩いていた。そして実際にワンチャンスをモノにしてプロになった逸話がある。)

『いつでもセッション受けて立つ! 下手だけどそれもJAZZ。』

『んじゃ、今度オレの師匠を紹介するよ! めっちゃカッコいいぜ!』

(新城の師匠? めちゃくちゃ上手いんだろうなあ。そしてたぶんイケメンに違いないな。)

新城が師匠を紹介するという約束の日。

いつものスタジオで新城と僕は先に入って音作りして『師匠』を待っていた。

内心ドキドキしながら待っていると、スタジオのガラス窓から誰かが覗いてる。

ミュージシャンっぽい渋めのイケメンだ。ドアを開けて入ってきた。

『遅れてごめ～ん！ 許してチャイナ?? 怒っちゃいや～よっ。泣』

(なにになに～? この明るさ! チャイナってダジャレ?? イケメンなのに気さくな人だ。)

『あっ。初めまして! 新城の友達の橋本です。今日はよろしくお願いします。』

『僕はしゅう! こちらこそよろびくね～! んじゃ音作るのでちょい待ちね～!』

(ギタリストって不思議な人種だよな～。音色は暗いのに人柄はなんか明るいよな～。)

新城の師匠のしゅう君から遅れること5分。

狼のような精悍な顔つきで身体は少しぼっちゃりした方が

汗びっしょりで申し訳なさげ～な顔で入室された。

『遅れて悪い! チャリンコ乗ろうと思ったらぜんぜん空気なくて。空気いれよ思っ  
てやったらパンクしてたっぽくて。時計みたらやっべ遅れるとか思っ。もう弟のチャ  
リ無断で借りて立ちこぎで来た!』

(時間にきっちりした人なんだなあ〜。僕らより先輩なのに偉ぶらないいい人たちだなあ。)

『ハシ、ドラムのK Jさんね。』と新城が紹介してくれた。

新城がセッティングしてくれたセッション会はやっぱレベルが高かった。

師匠・しゅう君はギターを持つと人が変わったように妖艶でセツナ系ブルースマン。

ドラムのK Jさんはマジメな人柄がにじみでるようなリズムを魂で叩くウルフ系ドラマー。

新城は相変わらずの『変態ギタリスト』靴下をあえて右左不揃いに履くのがお洒落という。

『新城の友達だから解るよ。はっしーも変態さ。これはほめ言葉だよ！』

類は友を呼ぶ。

エレキギターを通じて出会えた人たち。

変態と天才は紙一重。表裏一体。

強烈な個性にリスペクトの念を込め『変態』と僕らは言う。

そして普通では『成し遂げられない事』を

やっつてのける発明家なんかも得てして『強烈な個性』の持ち主であるという。

『長所』と『短所』も表裏一体。

オセロゲームのように『くるり』と発想転換すれば

自分の『長所』もたくさんありそうだと思えた。

## ～K Jさんのパスタ～

ドラマのK Jさんは面倒見の良いお兄さん。新城と共に僕の事も可愛がってくれた。

『おお！ 今なにやってるんだ？ うちあがって酒でも飲んでけよ！』と気さくに声をかけてくれた。

一人暮らしのK Jさんの部屋は2DKでとても広く、

お洒落なりキュールやバーボンがショットBARのように綺麗に置かれている。

普段は建築の職人をやっているK Jさんは『趣味と仕事』をきっちり分ける大人だ。

そして僕らのような後輩にも偉ぶらず『同等の目線』で接してくれる兄貴的存在。

楽しい事面白い事が大好きで『ゲーム』やったり映画をみたり、

そしてお洒落なBGMをつまみにお酒を頂いて、

男同士の『バカな話し』とか、時に『人生を語ったり』

『一人で悩んでたってしょうがねえよ！ また酒飲みたきゃ付き合うぜ』

(そんな温かな一言が僕にとってどれだけの勇気をくれたことか。)

『みんな腹減ってねえか?? 大したもん作れないケド、メシ食ってけよ!』

K Jさんの得意料理はパスタだった。

フライパンで茹でたパスタに混ぜるだけのソースを絡めた『K Jさんのパスタ』

『世の中にこんな美味しいものがあるのか??』

と僕はいつもその味に感動していた。

同じ材料を買って自分で作っても、

『なぜだろう?? 美味しいけど。。K Jさんのパスタには敵わないなあ〜。』

たぶん。いやきっと。

料理をしてくれた『真心』も一緒に味わっていたのだと思う。

その優しさや温かさ。一つの料理にいろんな背景がみえる。

一日中汗まみれで働いて貰ったお給料。

そのエネルギーの対価であるお金を使って買った食材。

そしてまた僕らのために『調理』にもエネルギー使った。

KJさんの大きな『愛情』は時に厳しくもあり父親のよう。

『ああ！ そうか！ 料理は愛情っていうけど本当だ！』

未だに

～パスタを食べるとKJさんを思い出す～

ちなみに、、、

～モツ煮込みは〇〇さん最高！～

～すき焼きは〇〇くん最高！～

～から揚げなら〇〇さん世界一だろ！～

『料理を御馳走になった記憶は全く色あせる事はない。』

『おもてなしの精神』は日本人の心。

『心』を貰ったのだから大事にしていきたい。



～親友で戦友～

いつものようにアーケードの閉ざされたシャッターにもたれてギターを弾いていた。

『俺さあ。彼女にフラれちゃった。』と新城がいう。

『え？ いつの話しよそれ？』

『今日。いまさっき。』

どんよ～りした空気が流れた。こんな落ち込んでいる彼をみるのは初めてだ。

『ビールでも飲むか！！』と彼は自動販売機で缶ビールを買ってきた。

『俺さ、あんま酒強くないんだ。』と僕は素直に言った。

『え？ そうなの？ いや実は俺もビール苦くてダメなんだ！』

(じゃなんでビール買った？ (笑))

『ビールよりコーラのが絶対うまいよな！でもギタリストにゃビールが似合う。』

そんな話しかから、沖縄の話しやサッカー少年だった昔話に花が咲き、

『そーいや卒業後どうしてたの？』と中学卒業したその後の体験を語り合った。

『高校3年間ずっとサッカーひとすじでやってきた。3年生の時にじん帯をやっちゃってさ。手術してリハビリもした。けど復帰してみたらもう自分の足じゃないみたいでさ。。。』彼は話を続けた。

『サッカーでプロになるのを諦めて就職したけど、合わないと感じてすぐ辞めちゃった。』

妙な親近感を覚えた僕は、新城には包み隠さず全て話してみようと思った。

『中三のノイローゼ』の事。『高校リタイアの原因』『フリーター』からの『大工の見習い』

そこで負った人間不信の根っこ。

『そこからはなにをやってもダメ。バイトも続かないし。。ほぼ家に引きこもってた』

こんな暗い話を誰かに話すのは初めてだ。彼は真剣に聞いてくれた。

『その気持ち全ては理解できないけど辛い気持ちは解るよ』と言って『うちは。。』彼が話してくれた。

彼の壮絶な人生。様々な苦難。それは僕が想像もしていなかった彼の『家族の問題』

僕なんかの何十倍や何百倍もの『心に傷を負った』はず。

それでも彼はそんな苦勞や苦難や心のキズなんかに負けないで逞しく生きている。

深くまで話してみて初めて解った。みんなそれぞれに悩みや傷を隠しながら生きてる。

どんな人間にも等しく『光と闇』が訪れる事。人間は必ずしも平等とは思わない。

でもそれは『闇が深ければ深いほど。放つ輝きもまた大きい』という事だ。

(人は人と深く交わる事で成長していく。)

悲しみが深ければ深いほど、より大きな愛を持って優しくできる。

苦難がやってきたらそれをチャンスと捉えて前へ前へ進んでいく。

～彼女にフラれたと言って買ってきたビールは重たいまんま～

長い付き合いになるだろうと直感し友人と心通わせた夜。

## ～チャンスより友達を選んだ男～

新城は『プロギタリスト』になるのが夢でバンドをやっていた。

バンドのメンバーは地元の友達4人。僕も良く知る友人たちだった。

フロントマンの元宮と僕とは同じマンションに住んでいた幼なじみでもある。

子供の頃から物怖じしない誰とでも仲良くなれる素質を持つ元宮は交友関係が広い。

RIZE というミクスチャーロックバンドのフロントマンと元宮が友達であった事。

RIZE が華々しいデビューを飾ると

『俺らの後にチャンスを』と新城や元宮のバンドに声をかけたという。

そんな事を全く知らないでいた僕は、

『なぜ新城はオレなんかといるんだろう？』と思いながらも新城の部屋でまったりと過ごす日々。

売れないマンガ家が住むような新城のアパートは『たまり場』

一人暮らしを始めた彼。『うちは24時間営業のしゃべり場だ!』と皆を快く招き入れた。

CDはジャンルを問わず約300枚を保有し、彼の部屋はいつも音楽が流れていた。

トイレは共同、風呂なし。冷蔵庫もない。

『え?? 冷蔵庫くらい買ったら??』と茶化して僕はいう。

『あるじゃん! コンビニっていう冷蔵庫がさ! あと自動販売機っていう冷蔵庫もある。充分だろ(笑)』

風呂は銭湯でめんどくさい時はキッチンでバケツに水を汲んで浴びる。

ガスもない。コンロもない。テレビも。

『ギターとラジカセありゃ充分! テレビなんかあったら集中して本も読めないだろ?(笑)』

彼は貧乏だったかもしれないけど『心が豊か』で『ポジティブ』な人間。

そんな人間を周りが放っておくわけがない。なのに彼はなぜか僕の傍にいてくれた。

引きこもりの僕をグイグイと引っ張ってくれた新城。

『夢を語り合った日々。』

『その中で見つけた自分の人生のテーマと夢』

『俺は絶対に社会復帰して自分と同じような苦しみを持つ人を励まし勇気を与えられる人間になる。』

そして『何年かかってもいい。世界一のギタリストを目指すよ!』

彼の励ましがあってこそ前に進む勇気と決意ができた。

でもそれは

『新城がプロになるチャンスを犠牲にしたもうひとつの新城のドラマ。』

～新城の物語～

彼は元宮や仲間と組んだバンドで『プロデビューのチャンスを掴みかけていた。』

元宮の友人『ジェシー』がメジャーシーンで華々しくデビューすると、

『俺らの後に続け』と言わんばかりにミュージシャン志望の元宮や新城にも『熱い声』がかかった。

『このご時世、バンドで旗をあげたくてデモテープが送られてくるけどレコード会社の社員はそんなのまともに聞いちゃいない。毎日腐るほど送られてくるからしょうがないっちゃしょうがない。』

『もし、お前らが本気で音楽でやっていきたいなら俺が応援する！』

『まずは音源を作れ。レコード会社の重役に直接手渡してやるから。本気で作れ。』

新城は『デモテープの制作』に仲間と共に挑んだ。

だが、新城は目の前で苦しむ橋本という友人を『放っておけない』思いでいた。

『デビューするには絶好のチャンス』

でも『今ここで自分が橋本を助けなかったら彼はどうなる？』

『自分の夢と』『目の前で苦しむ友人と』



『オレは一体どうすればいい?? こんなに悩む位なら

いっそオレの右腕なんか斬りおとしてください!』

彼は祈った。

すると昔に自分が書いた体験発表の原稿をみつけた。

そこにはこう書いてあった。

『自分は一流のギタリストになる事が目標です。そのためにまずは一流の人間になる事をめざします!』

～彼の中で『悩みが解けた瞬間だった』という。～

数年後、彼はそのことを振り返りながら僕に話してくれた。

『その原稿みて思った。苦しむ友人を見捨ててプロになっても一流にはなれんだろうってさ。』

(なんて男だ。逆の立場だったらオレはどうしていただろうか? 想像もできない。)

『それに元宮は運命の出会いを果たして大躍進した。アイツの曲で数百万人の人が勇気もらったって言うてるんだ。それも俺らとやってたら今のアイツはないんだよ。そしてあの後すぐに俺も運命の女性と出会い結婚できて。子供も産まれて幸せだ。ハシがいてくれたお蔭だよありがとう。』

～もしも～

新城や元宮や仲間たちに出逢ってなかったら??

僕は傲慢になって人のせいにして生きていたかもしれない。

彼らのような『不器用な生き方』は時に損なことばかりかもしれない。

でも大丈夫だ!!

『俺は解ってるからそれでいいだろ??』

『俺も不器用な人間だから上手く云えない』

けど、お前らみたいなイイ奴となら、

この長いマラソンも最後まで付き合うよ。

～友人たちに贈るメッセージとして～

～闇の散歩も光の一步～

～21歳のメリークリスマス～

2001年12月24日。

僕は新城と共にKJさん宅でのホームパーティーに招かれていた。

野郎だらけのホームパーティー。酒やつまみというお土産を持参し新城とKJさん宅へと向かう。

『新城。今日はクリスマス前夜だって知ってた??』と、僕は少し嘆きながらぼやいた。

『え?? クリスマスというのは外国の祭りだろ! 日本人にゃ関係なくね??』

(そこまでいうか? (笑) 本当はチキンとか食べたいくせに良く言うよ～。笑)

『12月24日にわざわざ集まって飲むこと自体がクリスマス意識してねえ??』

『気のせいだろお～(笑) ただの飲み会がたまたま12月24日ってだけだ。偶然だ!』

(こういう奴に限って彼女できたらめっちゃ張り切ってディズニーランドとか行っちゃう人間だろう。)

中二レベルの会話を繰り広げながら気がつけばK Jさん宅に到着。

中にお邪魔させて頂くとギターの師匠・しゅう君やいつもの面々で酒盛りは始まっていた。

『お〜!! みんなメリ〜クリスマス。。じゃない。K Jの飲み会にようこそ!』と少しほろ酔いのしゅう君が言った。そこまで徹底してるとなんか清々しくもかんじられた。(笑)

みんなでゲームしたりバカ話したりワイワイと賑やかな『飲み会』

僕らは20代前半。これからの『やりたいこと』や『夢』や『希望』に溢れていた。

様々な個性の人間の中で多種多様な価値観が存在することを当時の僕は知らなかった。

対話に歩く日々の中で『一人として同じ人間は存在しない』事を知り、

自分の中にある『心の書庫』に一冊また一冊と様々な人間の人生体験をつんでいった。

生身の人間の『声』は、時に映画やテレビなんかよりも『ドラマティック』に感じられた。

～楽しい夜は深まっていき、段々とお酒がまわってくると人生を語りはじめた僕ら～

僕は新年に賭ける思いと社会復帰への不安を素直に打ち明けるとみんな真剣に聞いてアドバイスをくれた。

『はっし～は病気なんかではないと思うよ！ 超個性的なだけでさ！ 動悸が不安で社会復帰をためらっているならば一度専門家に診て貰うのもいいかもね！』

『三日で三步進んで二歩下がるでもいいじゃない？ スタートから一步進める時もある』

『三步進める時もある。地道に頑張ればさ、す～っと開ける時がくるよ。冬は必ず春となる。』

～三步進めるも時ある。～

～心の冬も必ず春となる～

どんなに寒い冬でも季節が巡って春となるのが自然の法則。

ただ自分らしくあるがままを受け入れて前に進む勇気をくれた。

暗闇に紛れて過ごしてきた引きこもりの日々の見えない『一步』

目には見えなくっても外にでたから『殻を超えて』出会えた人がいる。

たкусんの方と出会ってたкусん話して気がつけば、

『あともう一步じゃないか！ 動悸なんかにまけるな自分！』

地位も名誉も名声も要らない。

欲しいのはありのまま光輝く未来だけだ。

## ～心療内科の門～

2002年 春の日の昼下がり。

心の問題を専門家に診てもらおうと心療内科の門を叩いた。

今まで(自分は一体なんの病気なのだろう?)ともやもやした思いでいた。

外出時にだけ起きる強い動悸の正体はまるで解らない。

ファミレスで友人とお茶をしているときに急に襲ってきた動悸と息切れ。

コーヒーカップを持つ手がヤバイ位にぶるぶると震えるほどの体の痺れ。

『みんなワリィ。ちょっと用事思い出したわ。先帰るね。』

と言って店をでて、歩いている途中でも倒れそうになりながらなんとか家に帰ってきた。

(パニック発作の症状と似ている。それが強いトラウマだった。)



EQ～心の知能指数～という本との出会いによってより身近に感じるようになった心の問題。

心にさまざまな問題を抱えてしまった人への具体的なアドバイスも書かれていた。

そして僕も『自分の心の問題を解きたい』という思いで心療内科の門をたたいた。

受付を済ませ手渡された問診票に今までの症状などをこと細かく書いている間も、

(治らないとかいわれんのかな～？ みんなのいう通りなんでもない感じなのかなあ～？)

目を閉じて心の中で祈りながら静かに呼ばれるのを待っていた。

こんな平日の昼間でも待合室は患者さんで埋め尽くされている。

それだけ心の苦しみ悩みを持つ人がいるんだと思うと少し安堵感を覚えた。

～橋本さん。診察室にお入りください。～とアナウンスが流れ院長室と書かれた部屋に入った。

院長先生と思わしき方が僕が書いた問診票をみながらいくつもの質問をしてきた。

『あなたは高校を中退しているんだね。なぜ辞めたの?』と先生が僕に質問を投げかけた。

『中学三年生の頃からノイローゼのような状態があって、女性の視線が急に怖くなったもですね。一年間はなんとか耐えて、進学したのですが。高校入学してすぐに自分の容姿の事で複数人から一斉にヒドイ言葉を言われたのがきっかけで一気に心が崩壊したような感覚でした。』

『それはとても辛かったね。今はどんな事がつらいのかな?』

『街を歩いていると動悸が激しくて。ひどい時は倒れそうになる時もあります。これさえなければいいなあとと思っています。夜は友人や仲間と勉強会に参加したり、様々な会合やセミナーにもでかけますが。あともう一步! 社会にでるには日常の中で外を出歩く事が大丈夫な状態になれば。』

『そうかぁいろいろ頑張っているんだね! その動悸ならすぐに治るよ。』

(え?? マジで??)

『橋本くんの症状はとても軽いから大丈夫。しばらくお薬で治療して。あとはその強い精神力で自然に完治していくでしょう。』

お会計を済ませて、お医者さんから処方してもらった薬をもらい病院を後にした。

特別な病名はないとしながらもあえて名つけるなら『思春期特有の視線恐怖障害』との事。

お医者さんのいう強い精神力とはきっと『信じる力』のことを指しているのだと思った。

信じるに値するだけの素晴らしい親友ができた事が僕の人生で起きた最初の『キセキ』  
だろう。

## ～数字の魔法と信仰と～

宮沢賢治さんの作品『銀河鉄道の夜』の世界感に感銘を受けた。

『一冊の本がこんなにも楽しくて温かくて深い感動をくれるなんて』

本をあまり読んでこなかった自分。

『銀河鉄道の夜』との出逢いは僕の人生を変えた。

宮沢賢治さんの誕生日が『8月27日』との事。

時代は違えど僕の誕生日『8月27日』と不思議な縁を感じた。

生き方としての『哲学』を宮沢賢治さんから教わった気がした。

『法華経』の熱心な信仰者だった宮沢賢治さんの生き様は

『不器用』とさえ思える位に『ストイック』で『人の為に』尽くした人生。

『弱者を護り強きを挫く』その精神。僕は素直に『カッコイイ』と思った。

人生の道標としての目指すべき『自分の在り方』を自分のルーツに求めた。

幼き日に『仏壇に一生懸命に祈っていたおばあちゃんの姿』をみて育った僕は

『おばあちゃんはなぜあんなに一生懸命に祈っていたのか？』が長年の疑問だった。

(おばあちゃんが弱い?? そんなわけない。仏のような穏やかな人だ)

おばあちゃんは旦那さんを早くに亡くしている。

まだ幼かった3人の男の子たちを女手一つで立派に育て上げた。

それどころか病気がちな母親の面倒まで一人で背負った。

『いつも笑顔でにこにこ朗らかにして。苦難にも負けず立ち向かう勇気』

～おばあちゃんの桐ダンスから幼き日の僕の写真がでてきた～

それをみた僕はなんとも云えない不思議な気持ちになった。

ひょっとしたら僕らのために祈っていたのかもな。

正座して何時間も何時間も。毎日欠かす事なく。

親友である新城も『法華経』を学び実践する仏道修行者であった。

彼は様々な困難にもマケズ逞しく生きる青年であり理想や信念に生きる男。

『心のふるさと沖縄』と『生まれ日の27という数字』『仏道を求める心』

数字に隠された暗号は自分には解る。

それは自分の進むべき未来を指し示す『魔法の数字』

自然の摂理に則って生きるのが人間本来の姿であるとしたら

自分に与えられた役割を果たして行く事が一番の幸せかもしれないな。

『理想』を胸に抱き『人の為に尽くす』事は、

時に『痛み』も『苦しみ』も『孤独』も一身に引き受ける事。

それでも謙虚に学び続け『祈り』『励まし』『笑顔で生きる』

『銀河鉄道の夜』にみた本当の友情の姿や美しい世界観。

自分がどこまでできるか？ なんて解らないケド、

まだまだ若い自分の未来への希望だけは大きく。

一人でも『あなたがいてくれて良かった』と言って貰えたら『僕の人生に後悔はない』

## ～心に残る言葉～

ある日ギターを教えてくれたしゅう君が僕にアドバイスをくれた。

『ギターが上手になりたい?? それならまず心を強くすることだよ。それが遠回りのように一番の近道。』

僕もね、精神的に弱い部分があって過去にはイジメられた経験もあるんだ。僕はその時にギターに出会うんだけど。貧乏でギターを買えなくてね。畳を解いて6本の弦に見立ててギターの練習をしていたんだ。』

(しゅう君が昔イジメられていた?? 全然そんなイメージない。人は見た目じゃ解らないなあ。)

『ハシは恵まれているよ。僕には新城みたいな友達はいなかったからね。』

(確かにそうかもしれない。新城は人間としての徳を積んだような信念と人徳の男だ。)

『土台をしっかりつくっていけば絶対にギターは上達する。変な話しギターは弾かなくても人間として成長していけば不思議と上達してる事もあるんだよ。いろんな事を自分らしく頑張る事。かなあ。』

『心を強くすること。土台を固める事。』



僕の胸に響いた魂のアドバイス。

『心』

目には見えないけど、幸せに感じるも不幸を感じるも『心』次第か。

『心』

テクニックや知識だけでは伝わらない『何か』があるなら、

それは自分自身をさらけ出せない『臆病な心』かもしれない。

戦争の極限は人間不信だったな。

不信にとってかわるは『勇気』か。

『たった一人を信じる勇気さえあればいい。』

石ころでも、宝石でも、太陽でも、星でも、

自分が100%信じれるならどんなモノでも。

一人でも信じ切れる本物の親友がいたなら最高だ。

『新城がいる。』

オレはそれだけで恵まれている。

## ～太陽散歩の3歩くん～

朝目覚めると特別変わりのない日常。

御本尊の前には昨日処方された薬が置かれている。

『絶対に治す！ 社会復帰する！ 100倍のパワーを与えて下さい！』

そう強く決めて祈った。

過去にばかり縛られて過去ばかり振り返る自分はもう卒業していた。

現在から未来に向けて、この胸に光がさす事だけを信じて頑張ってきた。

『絶対に大丈夫だ！』そんな事を思いながら処方された薬を飲んだ。

『祈りのお蔭で100倍効いたはずだ！ もう治っただろ！』と強く言い聞かせた。

『ヨシ！今日は早速実験に行ってみよう。動悸がしなければオレの勝ちだ！』

～この頃の太陽の光は苦手だった～

この日はいつもと少しだけ違って見えた太陽や景色。

少し散歩をしてみた。奥の方から人が歩いてくる。

いつもだったらここで強い動悸がはじまる。

(きにするな！他人はそれほどオレの事なんかみちゃいない)

どんどん接近してく…

(あれ？動悸しねえな？)

スッと通り過ぎた。スローモーションのように鮮明にクロスする瞬間。

昨日までの事がまるでウソだったかのように僕の心臓は穏やかに温かに脈打っている。

倒れるような気配も微塵も感じない。怖いというネガティブな思いも湧かない。

(ひょっとしてもう治ったのかな?? もう少しだけ散歩してみよう。)

僕はそのまま歩みを続けた。

いつも避けて通っていた人通りの多い商店街を歩いた。

(なんだろう? 今日はやけに会おう人出会う人みな幸せな温かな表情に映るなあ。)

僕は歩き続けた。

(太陽の下でこんなに歩いたのは何年ぶりだろう。)

僕は嬉しくてどこまでも歩き続けた。

人混みを抜け、街をすり抜け、土手沿いの散歩道にたどり着き。

木々の間から差す光に包まれて自然の香りを胸いっぱい吸って。

見上げた空の色。こんなにも優しく僕を包んでくれる優しい色があったのか。

目を閉じるとどこからか聴こえてくる温かな音や笑い声の織りなす懐かしいハーモニー。

見るもの 触れるもの そのひとつひとつが優しく僕の心に溶け込んでいく。

まるで生まれたての赤ちゃんのような好奇心がムネいっぱい広がっていく。

～自分のこころのなかにいた。子供のこえが僕にうたっていた。～

『もっといろんなところにゆきたいよ！』

『もっといろんなひとたちとお話したいよ。』

いつの間にか心の奥の奥のすみっこで氷つけにされていた。

ぼくの可愛いインナーチャイルドくんの元気な産声なのだろう。

(ごめんよ。でも産まれてきてくれてありがとう。これからはいろんなところへいこうねえ。)

～3歩くん。太陽と僕とだいすきな夏と空と香りに包まれていろんな景色や色をみにいこう。～

『日常に埋もれたキセキを見つけて感謝できた時。夢は無量大なのだ知った。』





## 第6章



## ～社会復帰・酒屋～

さっそく履歴書を買ってきた。仕事はどんな仕事でも良かった。

(早く働きたい) と僕の胸は希望とワクワクで溢れた。

散歩していると、以前あったはずのコンビニが潰れていて『酒屋さん』になっていた。

～オープニングスタッフ募集中～ と、張り紙が貼ってある。

(新しい出発に、新しい店舗と新しい仲間かぁ。ここでバイトしよう！)

僕はポケットからメモ帳を取り出して電話番号と担当者様の名前を紙に書いた。

『どんな出会いが待っているんだろう？ きっといい人たちだろうなぁ。』

面接をしてくれた店長さんは名字が『橋本』さんだった。種々、労働条件などのお話も終え、少し雑談をしていた。経営者としての初めてのチャレンジであるという事をお話しして下さった。

『これからダブル橋本で、頑張っていこう!』と言って、僕も元気よく『はい!』と返した。

オープンの準備に向けて商品の陳列やレイアウトを手伝いながらの店舗研修。エリアマネージャーのおねえ様から直接指導を受けながら『サービス業はとにかく明るく元気よくね!』と教わった。

オープンを明日に控えた最後のミーティング。会社のお偉いさんたちも視察にきていて皆で自己紹介。

僕は緊張屋さんなので自己紹介をふられた時の為に『なにを伝えたいか?』をメモに書いて持っていた。

『みなさま、はじめまして! 私は橋本昂祈と申します。趣味はエレキギターをやっています。偶然にも店長さんと同じ名字の橋本ですごく不思議な縁を感じています。橋本店長は面接の際に僕にこうお話ししてくれました。オーナーとしても新しい挑戦で少し不安もあるけどみんなと共に頑張っていきたい。と。僕はアルバイトという身分ですが気持ちは店長さんと同じ気持ちで、明るく・元気よく・お客さまに気持ちよくお買い物をして頂き、皆様と共にお店の発展の為に頑張ります! 宜しくお願い致します!』

(自己紹介、ながっ! 笑。)

～ほとぼしる若き熱い情熱の全てを、時にメモをチラ見しながらも元気いっぱい声に出した。～

自己紹介を終えた瞬間。皆の表情がぱあ〜っと明るくなり今日一番の拍手喝さいを頂いた。

後に、エリアマネージャーのお姉さまが『橋本くんの自己紹介を聴いて感動した。』と褒めてくれた。

～オープニングスタッフの醍醐味はオープニングキャンペーンにあり。～

オープン初日から3日間は『キャンギャル』のおねえ様を迎えての試飲キャンペーン。

『バドワイザーガール』にも負けてないセクシーな格好で路上でのお声掛けを頑張っ  
らっしゃる。

ほんの少しだけバブル崩壊後の余韻が残っていたためか？ 設営も風船やらくじ引きやら  
と豪華だった。

お店が環状線沿いのため車の騒音に苦戦している様子。『橋本くん。お店ヒマだから宣伝  
手伝ってきて』とはしも店長の鶴の一声。(待ってました！ はしも店長！ おれ、この日  
の為にノド温めてました！)

店先にでると真っ先に『のどは大丈夫ですか？ だいぶ擦れてますね。』とお姉さまの労  
をねぎらった。

『ありがとう！ 車の通りが多くて。でも大丈夫だよお。』と言うお姉さまのノドはカ  
ラカラとかれて可哀想だ。『だいぶ頑張ったのですねえ。車の排気ガスも吸って。僕もお  
声掛けお手伝いしますね！』

『お酒の、〇〇マートです～！！ 本日っ！！ 新規オープンいたしましたあ～～！！』

『大田区！ 近隣住民のみなさま！ 本日っ！！ 試飲キャンペーンを実施してます！！』

～もうこれ以上は出ないだろうと思われるMAXの声を張り上げ続けた～

(おっ！なんか良いかも?? 俺が声張り上げて注目させて止まらせる。そこでおねえ様が優しくお声掛けする。このパターンは良いな。おれはおばさまたちがきたら積極的にお声掛けする。キタ！この作戦！)

『おっ！頑張ってるじゃない橋本くん～。ケーキ買ってきたから休憩でたべなね！もうちょっと風船側にたったほうがいいよ。お客様の視線が看板にも目にとまるように立ち位置も工夫してみたらいいよ。』と

エリアマネージャーからの温かなアドバイス。

(なるほどなあ～！ 通行人の方になんのお店かを知ってもらわないと。一番宣伝したい目立つところに視線を向けさせるにはどうしたらよいか？ もあたまにいれながらやってみよう。そして通行の邪魔にならないポジションは守らないとな。)

～こうして楽しみながら商売のことを少し経験させて頂いた貴重な3日間の体験～

キャンペーンを頑張って。気が付けばアルバイト仲間とも自然と仲良くなっていた。

～バイクに乗りたい～

引きこもりだった僕ゆえにバイクや車は夢の乗り物だった。

バイクが大好きな友人とバイク雑誌をみながら『カッコイイなあ乗ってみたいなあ～』と強く思った。

(うわっ！ このアメリカンバイク！ ロックだなあ～。SR400も素敵だなあ～)

『取っちゃえば?? 中型免許!! 早けりゃ2週間ですぐとれるよ』と軽いノリで友人が勧めてくれた。

『そうなんだ?? じゃさっそく明日行ってくるわ教習所。』

翌日、神奈川県川崎市の関東モータースクールへと向かった。

受け付けで各種手続きを済ませると簡単に教習の案内の説明を受けた。

～3日後の実技教習～

教習車は『CB400スーパーフォア』～これぞバイクっていう名車だ～

(やっべ～！ ヤンキーまんがの世界じゃね？ こりゃたまらん！！ これですーリングとかも良いなあ。)

～の、前に。初心者なので250CCのバイクでスピード感を体験～

右手でアクセルをひねると発進するタイプのシンプルバイクにまたがり。

『発車おーらい。』

ブォォン～ドツツブォン～ドッドッ～身体に走る独特の緊張感、ジェットコースターの動き出す瞬間のような。なんともいえないドキドキ感。暴れだしそうな車体を自分の内ももでしっかり押さえて。小刻みに震える振動がバイクを支える身体全身に『イナズマ走る』血は熱く湧き踊り。爪の先から頭の先まで神経が繋がっている事が実感できる。真っ直ぐに目標点を捕える『目』も、感高いエンジンを聴き分ける『耳』も、ガソリンと金属の混ざり合う独特の匂いをかぎ分ける『嗅覚』も、『五感は目覚めて生きている感動が溢れだす。』

右手をグッと徐々に絞ってアクセルを開けると『金属の塊』は意外なほど従順にも素直に反応してタイヤが大地をぎゅと捉えて動き出す。真っ直ぐに見つめた目標点へむけて『風を切り裂くように』バイクは唸りをあげてグングンとスピードを上げていく。

～スピードに乗って走る瞬間はまるで地球の重力から解放されたかのように自由だ！～

バイクを停車させ、まだ振動の余韻が残る両足でアスファルト踏みしめた。



汗で少し湿ったヘルメットを脱いで、やわらかな風を感じながら僕は空をみあげた。

『超たのしい！ 最高だ！ バイク！！』

『こんな乗り物を発明した人に、ありがとう！ って今すぐ伝えたい！！』

～どんなことでもやりたいと思ったなら。まずはチャレンジ。それが飾り気のない自分の姿～

## ～英会話スクール～

英会話スクールに通うと決意したBABYあきのり君。若干21歳。

世間知らずで純粹すぎるのか『言い出したら何が何でもチャレンジ人間。』

(失敗体験談としてお気軽にお読みください(笑))

なぜ英会話スクールだったのか??

『オレはJAZZの本場に行って修行したいんや!! まず英語喋れないとなぁ??』

(そんな金あるなら直接アメリカ行っちゃえ! (笑) その前に日本語勉強しようぜ。笑)

夢を食べて生きるオレ。

当時は実家暮らしで恵まれて過ぎていた。

～原田さんという熱いアドバイザーさんとの出逢いで転機が訪れた～

彼女は『アフリカに学校を作るといデッカー夢を持っていた。

～原田さんは僕に夢を語った～

『アフリカに行った時。学校にも通わせて貰えずにゴミの山の中で金属やプラスチックを集めている子供たちと出会ったのね。この子たちは言葉は何となく通じるんだけど、文章の読み書きが出来ないの…。私はアフリカ滞在中に子供たちに読み書きを教えたりいろんな夢を語り合ったわ。子供たちも夢を語って要るときは瞳をキラキラさせて夢中でお話ししてくれるの。でも、一通り話し終えると、また、もとの暗い顔でうつむくの。～学校にも行けない僕らには無理かなあ。～って。子供を虐待する親が結構いてね。悲惨な状況を目のあたりにして。私たち日本人は本当に恵まれていると思った。アフリカの子供たちの純粋な瞳が忘れられない。子供たちの未来の為にせめて学校を作ってあげたいって決意して日本に帰ってきた。』

～スゲーでっかいハートの持ち主だ。僕はこの人とだったら同じ夢を見てもいいとさえ思った～

『オレは世界一のギタリストになるのが夢。高校中退して5年間家に引きこもった経験があってね。エレキギターを通じて出会えた方々との交流の中でたくさんの勇気やパワーを頂いた。アルバイトだけど社会復帰もできて本当に感謝してるんだ。自分が壁を乗り越えていく中で、こんな俺でもやればできるんだって証明したくて。こんなバカなおれが出来たら誰でもできるよ！ ってさ、そんな風に苦しむ人を励ましてあげれる人間になる事を目指しているよ。仕事して、勉強会や会合に出て、対話活動に歩き、自分の時間なんてあってないようなもの。でもね、引きこもっていた5年分を取り戻す思いで仕事に對外活動に頑張っているから逆に今がチャンスなんだと思ってる。』

原田さんはつい最近まで僕が引きこもっていた事を

『信じられない！ だってこんなに元気じゃん！』と驚いた様子だった。

『OK！ BABYあきのり君。スクールの事でもプライベートでも仕事でも全面協力するわ！』

～人との出会いで人生が変わる。良き先輩にであえたお蔭で良き思い出ばかりの青春の日々～

～3歩くん。宇宙を思い浮かべながら～

街を歩けば、様々な感性が交ざり合う『心のダイヤモンド磨き』の物語。

～社会復帰を叶えてからは外にいる時間のほうが長かった～

観るもの・触れるモノ・その一つ一つが新鮮。赤ちゃんのようなピュアな心。

『これなに??』『スゲー!』『なんで??』『教えて!』

リアルに人間とはオモシロイ生き物で『隠れている長所』を見つけ出し、

『教えてよ!』と教えを乞えば、また広がる世界がある事。

～どんなことがあっても人生を目いっぱい思いっきり楽しんでやろう～

『過去世・現世・未来世』そして永遠に続く『生命の旅』には始まりも無ければ終わりもない。

人間が記録として残している歴史が2000年～5000年だったとして、

『宇宙』からみたら『地球の誕生』自体が『赤ちゃん』みたいなモノだと僕は思う。

そして『地球』で産まれて『同じ時代』に『出会えた』事がどれだけの『確率』なのか？

まず『生きていること』自体が『キセキ』だ。『物凄いキセキの連続で産まれてきた。』

そして人間の人生『長生きでも80年～100年』

星々や宇宙の『数字や確率』から捉えるなら『ほんの瞬きする位の瞬間』の人の人生。

～否定やネガティブなど要らない。ただこのキセキ的瞬間瞬間を楽しみながら生きる～

『冬の寒い日』には、『寒いからこそ人の温かさに感動し大切に育もう』と思う。

『雨の日』には、外でずぶ濡れになりながらも『人生の主人公』を演じるのも良い。

『夏の蒸し暑い日』には、思いっきり汗をかいて、キンキンに冷えたかき氷『最高だ!』

～こうでなければいけないなんて、特別なルールは存在しない～

～自分が人生を思いっきり楽しむためのマイルールを作ってみよう～

『何が大好き』で、『どんなことに感動するか。』

『自分が笑顔でいれば。つられて人も笑い出す』

～そんな日々の暮らしの中で～

『どんな人に出逢えるだろうか??』『どんな素晴らしい長所を持ってるだろうか??』

『どんなキセキが起きるだろうか??』『自分にはどんな華がさくのだろうか??』

～美しい満月の日には～

『お月さま! ありがとうございます! 自分の目標が達成できました!』と感謝する。

～なにもないと思っていたその場所には。なにもないのではなく。忘れていただけだと思うから。～

今日も、明日も、明後日も、

大自然や大宇宙に感謝しながらたくさんの『キセキ』探しにゆこうと思う。





## ～苦手克服シリーズ2・ウェイター編～

英会話スクールに通うと決めたモノの『資金繰り』で壁にぶち当たり『高時給のバイト』を探していた。

アドバイザーの原田さんの同期の方からのご紹介で、

『ホテルの配膳人紹介所』は高時給が狙えるのでおススメとの事。

(宴会や婚礼、レストランなどのサービスのプロ集団)

～原田さんからの一通のメールが届いた。とある日の昼下がり。～

『私の同期の女の子が昔やっていたみたいだね。時給は1200円～1500円。月に20万は簡単に稼げるオイシイバイトだったと彼女ははなしてたよ。ただ、上の人が厳しいみたいでしょっちゅう怒られたとも言ってた。それでも仕事に慣れてくれば社食も無料で食べれていろんな人に出逢えて面白い仕事だってゆってたよ。もし、ヤル気があるなら事務所に直接交渉してくれるって！ 身体には気をつけてね！ BABYあきのり君。』

そのメールを頂いて『オレの為にいろんな方が動いて応援してくれている』事が嬉しかった。

だけど、いつものように『OK！ やりましょう！』とは即決できない自分がいて心の葛藤があった。

(ウエイターかぁ。この世で一番苦手な仕事かもしれない。自信ないなぁ～。)

いつになく弱気な自分がいた。未経験という事、自分が一番避けてきた仕事。半ば、ウエイターだけは無理だと決めつけていた事。過去の暗かった時期が頭をよぎった。引きこもりで外にも出れなかった自分。

(逆にチャンスじゃないか?? 苦手な事を苦手なままにしないで得意分野に変えるチャンスかもしれない。オレは世界一のギタリストになるって決めたよな? 世界一ってのは人間としても一流を目指す事だ! あきのり! ビビってんじゃねーぞっ!)

～人が怖いで世界一なんて取れるわけがねえ!! ～

大きく深呼吸して、御本尊に祈った。

沸々と湧き上がる思い・若きゆえの大情熱。

祈り終わるとまた大きく深呼吸をして、

自分の右の膝を手で思いっきり殴りつけた。

『橋本 昂祈をなめんじゃねーぞっ!! オレの本気をだしてやんぜ!!』

弱気になりそうな自分を鼓舞するように力強く呟いた。

その勢いで原田さんにメールをお返しした。

『その方を紹介してもらえますか？ 今すぐにも動きだせます！ 宜しくお伝え下さい。』と。

## ～ホテルの常備配膳人～

原田さんの同期の方が素早く対応してくれて『面接に来てください』との事。

履歴書もない、ハンコと身分証だけ持って藤沢駅に着いたら連絡下さいと担当者様からのご伝言。

京浜東北線に乗り横浜で東海道線に乗り継ぎ、

藤沢駅に到着すると湘南特有の潮の香りがほんのり漂っていて夏に近い事を感じられた。

かなりの方向音痴である僕は事務所の場所が解らず何度も電話で場所を確認しなんとか時間通りに事務所にたどり着いた。

『やあ、キミが橋本君かい？ ○○ちゃんから話は聞いてるよ。まあまあそのテーブルに適当に座って！』

手渡された書類は勤務希望報告書。酒屋のアルバイトを辞めてここにきた僕は(24時間、何時間でも、何曜日でもOK！希望額は月に20万円以上)と書いた。

担当者さんが勤務希望報告書を事細かにチェックしてる時の微妙～な空気感(笑)

(最低20万とか書きちゃって大丈夫だったかな。やりすぎたかなあ?)と若干の不安が過る。

『橋本君は今はフリーなの？ 週5日できる？ 朝早いのも大丈夫？』

『はい！ 週5なら全然余裕です！ 朝早いのも大丈夫です！』

『偶然にも昨日さ、ホテルの常勤の仕事が空いたんだよね！ ちょっと朝が早いケド、早朝の手当てもついて2時間は時給が倍になる。橋本君は配膳が初めてだから時給1200円からスタートしてもらうけど、実働8時間で25万円から30万円は稼げる仕事だよ。タイミングが良かったネ！ ラッキーだよ橋本君！ 普通は常勤の仕事ってみんなやりたがるからすぐに埋まってしまうんだよ。』

(まじか?? アルバイトでそれだけ貰えたら確かにラッキーだな！ 今までの倍以上じゃん！)

『勤務開始時間とホテルの場所を教えてください』と僕は聞いた。

『勤務開始時間は朝6時。30分前に着いてれば問題ないよ。着替える時間もあるから早めに出勤してね。場所は、横浜中華街のメイン通りを抜けたところにあるホテルのレストランで山下公園に近いよ。駅でいうと京浜東北線の石川町駅から歩いて10分位で着く。今時刻表を調べるから待ってて！』

(え?? じゃ早朝5時半に会社に着くとして。何時起きで何時の電車乗ればいいんだ??)

『橋本君の自宅の最寄駅から20分弱で石川町に着くね。だから早朝5時の電車でも充分間に合うよ!』

(限りなく始発の時間じゃね?? 笑。じゃ、オレは朝4時に起きないとダメじゃん?? 仕事も未経験なら早朝4時起きも未経験だわな。まっ最悪は寝なくても気合でカバーす

るか！)

『積山さん！ その仕事、僕にやらせてください！ 未経験だけど頑張ります！』

『遅刻だけは絶対にだめだよ？ 仕事はね、バイキング形式だから未経験でも大丈夫！ 頑張れ！』と担当者様は力強く励まして下さった。配膳人でも条件によってはホテルとの契約を済ませないといけない。後日、ホテルの担当者様の面接を受けにスーツ姿で横浜中華街に出向いた。

～3歩くん。横浜中華街に降り立つ～

ホテルの担当者様との面談の日。スーツ姿で横浜中華街に降り立った。

～ちなみに産まれて初めて来た『横浜中華街』～

石川町で降りると、

右にゆけば『お洒落なファッション街の元町』

道なりにゆけば『テレビで御なじみ横浜中華街』

メイン通りに入ると『どこから来たんだ?』と思うほど通りは人で埋め尽くされている。

祭りをやっているのか?? と思うほどの賑わい。東京には絶対のない魅力的な街並みだ。

仕事で来ているにも関わらず無性に～アジア雑貨～が気になって仕方ない。

占いや手相の看板も気になる。～イタ気持ちいい足つぼマッサージ屋さん～

タピオカのココナッツミルク飲みながら楽しそうに歩くカップルとか。

中華の有名店の肉まんの湯気や香りが食欲をそそる。

チャイナ服のおねえ様が天津甘栗を試食で一粒くれた。

(くっそー。遊びに来たんじゃないんだ。面談終わったら遊んで帰るぜ！ 横浜！)

季節は初夏。クールビズなんて言葉もなかった時代。

スーツきて、ネクタイ締めて、やたら重いビジネスカバン持って、

歩いてるだけなのにワイシャツはすでに汗だく。ため息を一つついた。

(こんなに混雑してたら10分じゃ到着できんな。次からはもっと早く来よう。)

メイン通りをようやく抜け切ると目の前には立派なホテルが見えた。

(ホテル〇〇IN。ここで間違いないな。結構きれいで立派なホテルじゃん。)



社員用通路で受付を済ませると2Fの宴会場に案内された。

課長クラスのTHEホテルマンのダンディなオジ様が面談をしてくれた。

『積から話は聞いているよ、配膳初めてなんだって??』と課長が質問してきた。

『はい！ 右も左も解らないので、ご指導よろしくお願いします!』

『そんなに難しい仕事じゃない、慣れれば楽だよ。ただ朝が早いからね、大丈夫かな?』

『はい！ 気合で頑張ります!』

(もうここまできたら勇気凛々でヤル気出していくしかねえ!)

『じゃあ』といって、労働条件や契約のお話しになった。

『常備の配膳人という事で、お給料は直接ホテルから支払われる。朝6時から15時までの実働7.75h。朝の手当ては2時間で一勤務2400が支給される。時給は1200円からスタートしてもらうね。夜は婚礼や宴会も毎日あるから人が足りない時は助けて貰うかもしれない。じゃ、よければ書類にサインしてください。』と言って契約書を渡された。

書類に名前を書くときに、一文字一文字にタマシイを宿す思いで書いた。契約が滞りなく済むとほっと一息ついて課長と雑談や説明を受けながらロッカーやリネン室、食堂や休憩室を順々に案内してもらった。

最後に、所属先である『洋食レストラン』へ、これからお世話になる職場の方々に挨拶をしにいった。

シェフをはじめとする調理場の方々、レストランで御なじみの黒服の上司、社員さん、と順々にご挨拶ををしまわった。

そして僕が担当する朝番チームのリーダー・山田さんという女性を紹介して頂いた。

『初めまして、橋本と申します。よろしくお願ひします。』

山田さんはかなり微妙な顔つきで興味なさげに『ヨロシクネ』と言った。

その様子を見た課長が『山ちゃ〜ん、あんまイジメないでよ!』と茶菓した。

『私は本当に厳しいよ! 覚悟しときな!』と彼女は脅すように僕に言った。

(こええ〜。なんだこの女。初対面でそこまで言うんかね? 仕事なら上等だぜ!)

『はい、未熟者ゆえに、厳しくご指導のほどよろしくお願ひ致します!』凛としてオレは返した。

## ～ボスと姫と逆ギレ王子～

横浜・逆ギレ王子伝説。第一話。☆逆ギレ王子誕生☆

☆朝番のキャスト紹介☆

リーダー・山田ねえさん。ニックネーム『ボス』

朝番の小悪魔同僚。ニックネーム『姫』

朝番の新人橋本くん。ニックネーム『逆切れ王子』略して『王子』

なぜ僕が『逆切れ王子』と呼ばれるようになったか??

小悪魔的同僚と山田さんは『あの手この手で僕を辞めさせようと企んでいたらしい。』

(当時はそんな悪意を感じていなかったけど、後に本人たちから聞いた。笑。)

僕が右も左も解らなかった勤務初日目に『ビュフェの指揮』という大任をいきなり任された。

そして、仕事もロクに教えてもらえないまま僕は『ブユッフェの指揮』を一人でやっていた。

料理の補充と簡単にいっても『和食・洋食、サラダ、スープ、デザート、ジュースetc…』と50品目以上を全て一人で交換や補充するのは大変だった。

結構な理不尽な事も言われたし、ボスなんかは『アンタ本当にバカ!』と言葉がストレート過ぎる。(笑) 言葉がキツイ上に仕事も教えてもくれないとゆ〜。いろいろ難癖をつけては怒ってらっしゃる方々。

小悪魔(ヒメ)とボス(ねえさん)のコンビネーションは『菩薩のはしも君』を怒らせる天性のセンスを感じられる。

僕は怒ると口を一切聞かないタイプの人間で、行動で示すのがモットー。

そしてあまりに理不尽だと感じた事には黙ってはいない相手が誰であろうと噛みつく人間。

でも、仕事はマジメに取り組むのでそろそろ橋本君を受け入れて仲良くやろうとなったみたいだ。

相手が誰であろうと噛みつく人間性から『アンタホントに逆切れ多いよねえ〜。逆切れ王子!』

と小悪魔的同僚がなづけたニックネーム。略して『王子』

『ってかさ! 俺が逆切れ王子だったら、みんなはなんなのよ??』と僕は素朴な疑問を

投げかけた。

『ねえさんはボス！ キミが王子だったら私はヒメかなあ〜！ 今日からちゃんとヒメって呼びなよ！』

(職場でボスとか王子とか姫とか！ ウケる！ 後でなにされっかわかんねえから言うとおりにしよ。笑)

『王子っ！ なにやってんのよ！ トマトがないじゃない！！ オレンジジュースも！！』とボスのお叱り。

『マジっすか?? やっべえ〜！ さっき変えたばかりなのに。ソッコー見てきます！！』僕は慌ててホールへ確認しに向かおうとした。

『王子はもう休憩の時間でしょ?? 私とねえさんでやっとかから王子はご飯食べてきな！ 男の子なんだからたくさん食べてパワーチャージして。後で死ぬほどコキ使ってあげるわ〜☆笑。』とヒメは小悪魔のような笑みを浮かべてそう言った。

(優しいんだか優しくないんだかどっちだよ！ 笑。ホント、ねえさん大好き人間だよなあ〜。)

『王子は今のうちに休憩ね！ 戻ってきたらヒメと交代でランチビュッフェの準備。今日は忙しいよ〜！』とボスからの通達がおりた。

『トマトとオレンジジュースすいませんでした。トマトは冷蔵庫にストックあるのでよろしくお願ひします。じゃ、休憩いってきます〜☆』

このホテルの配膳人は社員食堂でノートに名前を書くだけで社食が無料で食べられる。

エプロンを外せばレストランのビュッフェからも自由に好きなだけ盛って食べても良い。

～5分程歩けば有名なデートスポットである山下公園。太陽の下で公園ランチってのも好きだ。～

みなとみらいの有名なホテル群と観覧車を眺めながら太陽と潮の香りを胸いっぱい吸った。

お洒落なハマっ子たちの様々な人間模様を観察したり、ファッションチェックしたりして楽しむ。

『こんな天気いい日は勉強したって身にならないや。仕事終わったらショッピングかな？ その前に足つぼ屋さんでもいくかな？ ヒマな人見つけてお茶でもしに行こうかなあ～☆』

～僕はこの街とこの街に住む人たちの事が大好きになった。第2の故郷・横浜みなとみらい～

『さて、ヒメがオレをコキ使うって？ 今度はどんな作戦練ってるのか？ 全く飽きさせない連中だぜ！ 笑』

## ～ヒメVS王子～・恋愛アドバイザー編・

横浜中華街にあって洋食のレストランとは不思議な感じがした。

ホテルの宿泊者様は朝食チケットでバイキング形式のお食事を楽しまれる。

前日の宿泊者数とチケット配布数によって準備の仕方もサービスの人員も変わる。

ランチタイムも日替わりでメニューが変わるかなりお得なビュッフェスタイルがメイン。

夜になると同じホテル内の重慶飯店で食事されるお客様が多く洋食レストランは超ヒマである。

『たまには朝と夜と変わって欲しいよねえ～』なんてブツブツ文句言いながらも実は忙しいほうが面白いしやりがいもあるに決まってる。

夜は夜で暇だったとしても僕らにとってはの最高のたまり場であった。

BARカウンターで『酒を一滴も飲めないと豪語するバーテンダー』のオリジナルカクテル飲みながら、厨房からは『サービスだ!』と言ってステーキやポテトフライを出してくれたり『みんなイイ人、面白い人』だ。

ホールの社員さんなんかは学校でも人気者だっただろうと思ってしまう位にオシャレな子たち。

厨房のメンバーは一癖も二癖もありそうな個性派揃いで 20 代前半の若い料理人が多かった。

みんなでカラオケに行ったりボーリングしたり映画を見に行ったり恋愛したりの若き人間模様。

『王子！ アンタどうせ暇でしょ？？ 帰りに買い物付き合っちょ～だい！』とおヒメ様のワガママ発言。

『暇じゃね～よっ！ (笑)。決めつけんなよ！ 俺だって英会話スクールとか忙しいんだぜ？？』

『あら～昨日は厨房の佐々木と飲みに行って佐々木の家泊まったって？ 笑。お忙しい事ね！ 笑。』

(なんで知ってたよ！ 笑。超ヒマ人みたいに思われてんじゃん！ 佐々木の奴、ゲロったな？)

『はい。承知いたしました。喜んで荷物持ちでもなんでもさせていただきます。今日はどちらへ？？』

『タピオカミルク飲みたい！ ついでに王子の恋愛相談にもものってあげるわ～☆超優しくない私？？』

(うおー！ 何様じゃいっ！ 笑。まっ、憎まれ口叩いてもいろいろ心配してくれてるのは嬉しいぜ。)



～ヒメは束縛された可哀想な子。職場にいる時と帰りの数時間だけが彼女が羽を伸ばせる時間だった。～

(世の中にはどうにもならない状況ってあるんだな。いつかは本物のシンデレラに成れよヒメ。可愛い妹よ)

～そんな僕の気持ちとは裏腹に。ヒメは妖艶で小悪魔の自分をあえて演じているように僕には見えた。～

(ヒメ、菩薩のはしも君にゃあ本音でぶつかってこいよな。一瞬だけ見せる寂しげな瞳は騙せねえよ。)

『王子、それで。大好きな原田さんだっけ?? 幾つ年上なのよ??』

タピオカミルクをストローで美味しそうにちゅ～ちゅ～吸いながら姫が聞いてきた。

『ん?? 2つか3つ年上だなあ～。まるで赤ちゃん扱いでさあ～! 笑っちゃうよホント!』

そう答えて、アイスカフェオレを飲みながら自分の現状を笑ってみせた僕。

『王子! アンタ男として見られていない事に危機感を感じなさいよ! 今日は説教だよ! 笑。』

(今、ちょっと笑ったべ?? なあ?? 人の恋路がそんなおもしろいんか! 笑。)

『王子！ アンタ、その人のこと、本気の本気で大好きだっていうなら攻略法を教えてあげるわ！』

急に真面目な顔付きになってヒメは言った。

『俺はいつだって本気だぜ！ あの人のことを思うと勉強も手につかねえ。恋患いって奴だな。』

僕が素直に打ち明けると、ヒメは少し呆れた顔で首を軽く左右に振った。

『王子！ よく聴きな！ 女性ってのはみんな強がっても受け身なんだよ！！ 私だってそうだよ！』

急にヒートUPしだしたヒメ。(声デカいってみんなこっち見てんじゃん)と僕は当たりをキョロキョロ気にして見た。そんな事はお構いなしにヒメは言葉を続けた。

『いい！ 本当に好きだったら、なぜ抱きしめてあげないのさ！！ 王子は甘いよ！！ 押して押して押しまくる。男をみせてやりな！ 強引かもしれないけど恋愛って奪い合いなの。いい人は所詮いい人止まりで終わるの。王子が待ってる間にライバルがさらっていくのよ?? ね？ 想像しただけで嫌でしょ？ 成功を祈るわ！！ 頑張っ☆』

ヒメはノンストップで熱く語ってくれた。

ヒメのあまりの気迫に『おお！ サンキュー！ 頑張るわ！』と答えるのがやっとだった。

～男は単純。女性は知恵者。～

若い時の恋愛って上手く行けば天国だし、負けりゃ地獄で『弱肉強食』

でも、裏を返せば～本気で人を愛する事って自分でも想像もしないパワーが湧く。～

『素敵な人と出逢い。恋をして。結ばれて。一生護れるだけの強さが心に宿ったら。人は幸せと云う。』

## マスカケ線ってなに？ アジアの神秘手相屋さん

横浜中華街で働きだしてからというもの『アジアの神秘』にすっかり魅了されてしまった。

とある日の休憩時間。事務所でお茶を飲んでまったりしながら同僚とまったりとした会話。

『橋本くん、ちょっと手の平を見せてくれない??』と同期の子が何気なく言って、

『はい。どうぞ。』と僕は両手をパーにして差し出して見せた。

『橋本くん！ 凄い珍しい手相してるんだね！！ これって解る??』と少し興奮気味に同僚が聞いてきた。

『う～ん良く解らんケド。珍しい手相ってのは親から聞いている。珍しいから初節句にわざわざ手形とって貰ったんだ。』

『右も左も、感情線と頭脳線が横に一本になってる線はマスカケ線と言って別名・天下取りの手相だよ！ 掴んだものは離さない。徳川家康もこの手相だったの。凄い！ 初めてみた！』と同僚は僕の手相を褒めてくれた。

～そういえば。引きこもりの辛い時期も手のひらを見ながら親からの言葉を思い出して耐えてたっけ。～

僕は子供の頃は占いや手相を信じる子ではなかったし、祈る事やお墓参りにも一切興味がなかった。

手相の事は母親からさんざん聞かされてきたので『珍しいね』と言われる事にも慣れていた。

～初節句の手形に添えられた父親からのメッセージ。～

～『七転び八起き～勇気ある人生を～』～

なぜこのメッセージを選んだのか本当に疑問だった。

普通の親なら何度も転ぶ人生など子供に託すだろうか？

恐れずにチャレンジしていけという父の眼目は鋭い。

名前や人生も『占い』によって決められた形跡が見られる。

～父親は不思議な人だ。なにを考えているのか全く解らないけど僕が思う以上に頭のいい人なのかも～

(手相かぁ～。天下取りの手相と言われ続け、そろそろ 22 歳にもなろうとゆ～のになぁ??)

～職場近くのこじんまりした占い屋さんで実際に手相を診てもらった時の事～

『オニィさん！ 本当に良い手相ね！ 天下取りの手相と言って凄い強運の持ち主に現れる手相ね！ この手相は精神力に恵まれているし、ここ一番の集中力が凄いので目標を持って頑張れば大丈夫！ 生命線もいい生命線の張りだから体力面も心配ない！ かなり我が強くて個性的だから波乱万丈な人生かもしれないけど。個性が認められるまでは物怖じせずにチャレンジあるのみよ！ 勇気もってチャレンジし続けて！』

～なるほどねぇ～。望まなくても波瀾万丈なのは当たってるわな。七転び八起きはそういう意味か！ ～

『あとオニィさん！ とっても優しいね。だから人の話を聞く職業も向いてる！ 占い師

にもなれるよ!』

『そーなの?? でもオレは世界一のギタリストに成りたいんだ! ありがとう☆また寄らせてもらうよ!』

そういってポケットから財布を取り出し鑑定料を支払った。

僕がお店を出たら、占い師さんが外までお見送りしてくれた。

『オニイさんだったら何でもできるから世界一も夢じゃないよ。頑張って!』と声を掛けて貰った。

『サンキュー! 自分らしく色々頑張ってみるよ☆次は恋愛運でも診て貰うかな? (笑) またねえ〜☆』

そう告げると、僕はくるりと背を向けて歩き出した。『頑張ってね〜!』と微かに聞こえた声。それに応えるように(ありがとう!)と拳を握りしめて天高く突き上げて見せた。

〜意味のないように見えて。でも。それが人の幸せの為に役立つのなら華開かせて見せよう! ~

『例え、何年かかってもいいじゃないか! 自分の人生、自分が主役。脚本も演出も自分次第だ!』

## ～ピュアBOY☆真夜中過ぎの乾杯☆～

僕は『ビュッフェの指揮』を任されていたので調理師さんとも仲良くさせて頂いた。

細やかな報告・連絡・相談は『ほうれんそう』と言って仕事において大事とされる3要素。

ホール系の僕と厨房の方々との連携プレーで『ビュッフェの料理』は綺麗に保たれている。

とは言え、どうしても人間のやる事なので『ミス』がでるのも仕方がない事。

『どうすればより良いサービスができるか??』

仕事が終わった後に『飲みに行こう』と言って、

人間関係を深める事もサービス業では大事である。

～いつも顔色が悪い若い調理師。たっちゃん。～

彼とはプライベートでもよく遊んだ友達だ。



彼はすらっとして背も高く、顔も小さい。そしてよく見ると端正な顔立ちをしている。

(もったいないよなあ～。健康であればモデルにもなれそうな感じなのに。)と僕は思っていた。

工作中、具合悪そうに『ちょっとトイレ行ってきます。』と言って彼が抜けると、

10分位してお腹を押さえながら青ざめた顔で『すみマセンでした。』と戻って来る。

僕は『たっちゃん、大丈夫かよ?』といつも心配で仕方がなかった。

～とある日の仕事あがりに、たっちゃんと遊ぶ約束をしていた。～

伊勢崎町のショッピングモール周辺が彼のテリトリーで、

パチスロの全盛期と呼ばれる時代に彼もまたパチスロが大好きだった。

パチンコ屋を通りかかると、

『はしもっちゃん! ちょっと寄ってっていい??』とこんな感じで言ってくる。

『行きたいならどぞ。オレは他で適当に時間を潰してるからさあ～。んじゃ後で!』と言って、

僕は僕で本屋さんや服屋さんで買い物したり一人でお茶したりして時間を潰していた。

僕が時間を潰してパチンコ屋に迎えに行くと、青ざめた顔のたっちゃんのセツナイ後ろ姿。

『もうさぁ～。パチンコは辞めたら??』と、ついつい言ってしまうことになる。

でも、そんなセツナ系の友人の事が僕はけっこう好きだ。

いろんな人生在り方をみせてくれるので勉強にもなる。

そして、彼のいい所は人目につかない所で頑張れるのが最大の長所。

～だれもない厨房で、一人もくもくとオムレツの焼き方を練習したり。～

『当たり前だろう??』と彼は笑って言うがみんながみんなできる訳ではない。

仕事が終わったらすぐに帰りたいのがみんなの本音だろう。

人目につかない影の努力こそがどんな世界でも大事な事だ。

夜の伊勢崎ショッピングモールをすり抜けて駅までたどり着いた。

『はしもっちゃん！今日は家に泊まってけよ！』彼は屈託のない笑顔で僕に言った。

『いいのか?? んじゃ、コンビニで酒でも買ってお邪魔するか！』

昔から意味もなく友達の家遊びに行くのが好きだった僕は即決でそう答えた。

～ピュアBOY☆真夜中過ぎの乾杯2☆～

京急線に乗り彼の自宅の最寄駅で降りると、(なんだか寒くないか??) そう感じた。

微妙な気温の差や空気の質の違い、そして街ごとの香りの違い。

横浜からそんなに遠く離れていないにも関わらず全く違う感覚が5感を刺激した。

～この街は、木や土の香りがほのかに漂ってる。坂が多く寺が多いのも関係あるのか??

～

(不思議だなあ～。その土地土地で全く違う新しい発見がある。歴史を感じるこの街は好きだなあ。)

『はしもっちゃん。ここがうちから一番近いコンビニだよ。寄って行こう!』とたっちゃんと言った。

～夜のコンビニは魔法がかっている。要らないものまでついつい買ってしまう。～

僕らは買い物カゴに酒やビールやお茶の飲料をぼんぼん入れる。

お菓子やおつまみ、非常食のカップラーメン、朝食のおにぎりまで入れるとカゴはパンパンだ。

長い坂を歩きながら『遠いなあ～まだかよ??』なんて愚痴りながらも、

方向音痴である僕はすでに(明日ちゃんと駅までたどり着けるかなあ?)と心配した。

『あそこに見える建物がおれのアパートだよ。』と彼が指差した方向には、

2階建ての洋風で小綺麗なアパートが立っている。

(新城のアパートとは大違いだな！(笑)あとで家賃聞いてみよ！)

たっちゃんの部屋の前まで着くと『どーぞ!』と言って部屋に招いてくれた。

(意外にも小綺麗にしてあるんだな。モノが少ないから広くみえるよ。)

～どさっ～と、パンパンに飲み物とおつまみが入った袋を床におろした僕。

『まっ！ 適当に座って!』とたっちゃんに促されて座ると僕はコンビニの袋からビールを2本取り出した。つまみやポテトチップスは無造作にパーティー開き。プシュ～っと缶ビールを開けた。

『まっ！ とりあえずお疲れ～！！』と言って缶ビールを手渡した。

『おお～！ サンキュー！ お疲れ～！！』彼もそう言って乾杯をした。

～また。しょうこりもなく男同士のバカ話しに華が咲く。～

そして、定番の『卒アル』を見るとゆ～流れ。～男は単純である。～

『おれこう見えても昔はモテてたんだよ！』とたっちゃんが言った。

そしてたっちゃんが卒アルの写真を指差したのは『学生時代の彼女』

(知らねーよっ！ 笑。まっ、でもモテてたのはなんか解る気がするけどな。)

『へえ～。意外だなあ～。でも今でも顔色さえ良ければイケメンなんだけどなあ。』と、

僕は素直に褒めてあげると、彼は得意げな顔して微笑んだ。

『そうだ！』といって彼はカラーBOXに置いてあった箱を取り出して、

『これは俺の宝の箱さ！』と言いながらハコの中から一枚のノートを取り出した。

『おれさぁ～。オリジナルの詩を書くのが好きなんだよね！ はしもっちゃんはいい奴だからオレの詩を見せてあげるよ！ でも、他のやつには絶対に見せないしはしもっちゃんも言わないでよ！』と言って彼は宝物だというノートを僕に差し出した。

(意外すぎる！ 詩をかいてるのか？？ 宝物なんてコイツ結構かわいいところあるんじゃない。)

『ああ、解った。他の奴には言わない。オマエの熱いポエムを見せてくれるなんて嬉しいじゃん！』

～彼の自作のポエムを見て。なんだか、嬉しくて幸せな気分になったオレ。～

正直な感想を言うと『形にはまらないポエム』であり、

その時々彼の心のままを書いたのだろうと思った。

～しかし、なぜだろう？ テクニックではない。このポエムはオレの感情を動かした。感動した。～

～それは、彼の心の綺麗さ。そして、宝物を惜しみなく見せてくれたピュアな心。～

僕は思った。

テクニックは関係ない。

彼の純粋な心こそが宝物で、

素直に詩に表現されているから感動したんだ。

『サンキュー！ お前の宝物は最高だな！』

僕はそう言って右手で缶ビールを持ち (かんぱい☆) と彼に促した。

～ピュアBOY☆真夜中過ぎには夢でも語ろうか？～

～綺麗な月夜には、つかの間の、戦士たちの休息～



～守ってあげて。☆ヒメと花束☆～

～出会いあれば別れあり。～

職場のヒメが退職する事が正式に決まった時の事。

朝番のムードメーカーだった彼女が辞めるなんて考えてもいなかった。

ただでさえ、少数精鋭で頑張ってきたのに『本気で辞めるのか??』と、

僕はヒメがいない朝番チームなんて(この先そうすりゃいいんだ)と本気でそう思った。

～いつものように、ヒメとカフェ屋でお茶をして帰る事ももうないのか。～

『私がいなくなっても橋本くんがいるから大丈夫でしょ！あと、橋本くんにお願いがあ  
るの。』

ヒメは辞める数日前に僕を喫茶店に呼び出してそう言った。

『お願いってなんだ??俺にできることならなんでもいいよ。』と元気に答えたオレ。

～いつもと少し様子が違うヒメ。少し照れくさそうにこう言った。～

『私がいなくなったら、橋本くんがねえさんを守ってあげて!』と、少し頬を赤くして瞳は少しうるっとさせてヒメはそう言った。彼女の切実な願いだろう。

『もう、橋本くんしかいないんだからね! ねえさんをサポートできるのは橋本くんだけなんだから。』

(ばか。オレはねえさんの彼氏じゃね～しさ。笑。仕事なら精一杯支えるのは当然だろ!)

『言われなくても解ってるよ。まっ、ヒメがいなくなるのは淋しいけどな! 笑。心配しなくてもねえさんのサポート役なら買ってでるぜ!』

～『ボス』と呼ばれてみんなから愛されキャラのねえさん。誰もが応援したくなるような不思議な人だった。～

『ねえさん』は、僕なんかよりもずっと努力家で休みも満足に取らないまじめな人。

休みがなくてクタクタになっても、お客様の前ではとびっきりの笑顔で接して…。

僕はゆったりと週に2日も休みを頂いても手取りで25万から30万を貰って満足だった。

朝4時起きで5時の電車に乗って職場に向かい、定時の15時にはクタクタで帰る。

ねえさんは、休みも返上して出勤する時もあるし、夜の婚礼や宴会も手伝う時もある。

～そんながんばり屋さんな彼女の事を職場のみんなも大好きであった。～

～守ってあげてな。と、調理場のお兄さんからもヒメと同じように言われた。～

(だ・か・ら・オレはねえさんの彼氏か?? 笑。) と思ってしまう位に、『守ってあげて』の言葉をたくさんの方から言われたのを覚えている。それは、一重に『ねえさんと僕』は仕事上で欠かすことのできないパートナーである事。ある意味では『戦友』なのだ。重いもの等は女性には持たせたくないと思っていて、特にセッティングでは(みんなに楽させてあげる)事が朝番で唯一の男である自分の使命である。

『ヒメ。こんな俺でも精一杯にねえさんをサポートするから安心しろよな。』

～ヒメの最後の勤務が終わると、いつものようにBARカウンターでささやかにお祝いをした。～

(ホント、世話になったからな。よし!! サプライズで花でもプレゼントするか!!)

僕も仕事を終わらせてからみんなにばれない様に

制服の上に薄いジャンパーを羽織って外に飛び出した。

ホテルの前に止まっているタクシーに飛び乗ると、

『運転手さん、この近くに花屋ありませんか？ ご存じでしたら向かって頂けますか？？』

～中華街からは少し離れたところのお花屋さんに向かって車は走る。～

小さな店舗だけどとても素敵なお花さんに到着した。

綺麗な花を見ながらも (どんなのがいいんだろ??)

花束をプレゼントするのも初めての経験で戸惑っていた。

『すいません！ このオレンジの花で花束を作って頂けますか？？』

店員のおねえさまが予算に合わせて素敵にオレンジの花束を創ってくれた。

『プレゼントですか？？素敵ですね☆』と店員さん。

『ええ。職場の同僚が今日で最後の勤務です。流行りのサプライズってヤツです。笑。』  
と、照れ隠しで僕は正直に言った。(まあ。せめてもの、気持ちって事でさ。喜んでくれるかな?? ヒメの奴。笑。)

～タクシーでホテルまで戻り。ロビーを抜け、みんながいるレストランのBARカウンターへ。～

『ヒメ！ お疲れ様～！！ 今までありがとうなあ～☆』そう言ってヒメに花束を手渡した。

『え??』一瞬びっくりした表情のヒメ。

『うわあ～☆王子ありがとう♪♪私が一番好きな色☆なんで王子が知ってるのよっ！  
笑っ☆』と、最後の最後まで憎まれ口を叩く。全く小悪魔の彼女らしいリアクションだ。

～後日、ヒメからの御礼の電話～

『あの時さあ～。私。本当に感激してめちゃくちゃ嬉しかったんだよ。オレンジも一番好きな色なの。』

『へえ～。女は花束のプレゼントがそんなに嬉しいのか?? ヒメ、そのアイデア貰ったぜ！ 笑。』

～女性へのプレゼントに迷ったら。～

～お花をプレゼントして喜ばない女性はいないのだと思う。3歩くんなのです。～

## ～英会話スクール☆淡い恋心と仏法者の青春～

僕が通っていた英会話スクールは横浜駅を降りて徒歩10分くらいの場所にあった。

仕事が終わると横浜中華街の甘い誘惑を振り切るように石川町の駅へと急いだ。

～僕のアドバイザーさんはとても親切で、プライベートでもよくお世話になった。～

ちょうど、2002年に行われたサッカーの『日韓ワールドカップ』の時期。

季節は暖かな春から初夏。日本国民が自国でのワールドカップ開催に熱い日々を過ごした。

そして、僕もまた『淡い恋心』で胸を熱くする～ピュアBOY～の一人。

英会話スクールでも『どこの国を応援するか??』とみんなで盛り上がっていた。

『私は、やっぱりアフリカ勢だなあ～!! 南アフリカ頑張れ～!!』とアドバイザーの原田さん。

(この人どこまでもアフリカが好きなんだな! 笑。)

『いや～、普通は日本を応援するでしょ?? 俺は日本が優勝すると思う!』と僕は言う。

～夢見るピュアBOYの僕は、日本の実力を無視して本気で優勝すると思って応援していた。～

『BABYあきのり君。後で近くのダイエーにいったらごらん☆大画面でワールドカップ観れるよ! 私たちも仕事の合間にちよくちよく電化製品コーナーでキャーキャー言いながら応援してるわよ☆』

『そんな裏技があったのか?? スクールの空き時間に行ってみよ～☆』と僕は期待とドキドキで胸を熱くしてそう言った。

～若き日の僕は年上の女性にどうしようもない憧れがあった。～

自分自身が『カッコいい大人になる事』を目指して様々な活動にチャレンジしていた。

年上の女性は『オシャレの楽しみ方』や『夢の叶え方』を教えてくれる僕の憧れの存在。

彼女たちからしたら、まるで子供扱いのようで『可愛い可愛い弟くん。』といった具合だ。

『BABYあきのり君は、どうか大人になっても純粋で素直なままでいて頂戴ね☆』

～そんな風におねえ様方たちは可愛がってくれるケド、俺だって男なんだ。～

恋愛に特別な理由など要らない。『好きになっちゃったほうが負け??』

いやいや、同じ夢をみて同じ景色を共有できるのなら『負けるが勝ちだ』

～スクールで友達になった『ゆっき～ちゃん』という少女。

彼女も同じく年上のアドバイザーさんに恋心を抱いていた同志である。～

エクセルシオールカフェで同志のゆっき～とお茶をしながら恋愛話しに華が咲く。

『ゆきちゃんも?? 俺ら仲間だね!! ださ、英会話のレッスンは進んでる??』仲間を見つけてうれしくなった僕はゆきちゃんにそう聞いた。

『うん! 英語話せる人ってカッコイイよね☆レッスンは今のところマイペースかなあ??』

まだギリギリ未成年の彼女は飾り気のない純粋な女の子。僕とは妙に話しがあう友達だ。

～そして、彼女は産まれが複雑なために意味深な発言をする不思議少女であった。～

『…。そうなんだ? それは辛かったね。俺もつい最近まで引きこもりだったから気持ちは解るよ!』

彼女の出生の秘密や育ての両親との微妙な関係性は思春期の心を更に複雑にしているよ



うだ。

『でもさ、大丈夫！！ 環境的に凄く恵まれているから心配ないよ！ 落ち込んだ時はいつでもカラオケでも付き合うよ！』と、僕は精一杯に励ました。

『それじゃあ！ 今から早速行ってみようか？？ ぱあ〜っとカラオケで唄ってストレス発散！』純粋な彼女は家に居場所を感じられない寂しい気持ちを埋めるように英会話やカラオケで発散していた。

『OK！！ んじゃちょっと今からカラオケ屋に行ってみますか☆』

～カラオケ屋に行きストレスを発散する事。『一人で落ち込む位ならいつでも連絡してこい』と、僕は言った。それがゆっき〜との約束だ。～

～自分も新城という親友に助けられた男。一人の仏法者として放っておけるわけがない。  
～

原田さんへの淡い恋心をそっと胸にしまい。

俺は人の笑顔の為ならばいつでも駆けつける決意でいた。

～そんな不器用な人間性であるのは、

『辛い思いをみんなにはさせたくない。』との決意によるもの。～

それが、『正しい』とか『間違っている』とかは当時の僕には関係なかった。

それが例え、男だろうが女だろうが友達は友達で『幸せ』になってほしい。

～自分を犠牲にしてまでも??～

(そう。だから新城や僕のような生き方はみんなには参考にして欲しくない。)と僕は常々思っている。

悩める友がいりゃあ、一言でも励ましに『西へ東へ、縦横無尽に駆け巡った青春』

～そして仕事に。勉強会に様々な会合に。英会話スクールに。教習所。～

『新城！ このタフネスめっ。笑。ぶっ倒れるまでトコトン付き合うよ。それが俺の友情の証だよ。』

～新城と僕とが戦友として自分自身の弱さと向き合い正義や理想を掲げて戦った歴史。  
～

『勝ち取りたい夢があった。理想とする 30 歳像があった。だから頑張れた青春の日々。』

## ～新城が結婚?? ☆3歩くんの決意～

忙しい日々の中でも戦友の新城と連絡を取り合っほぼ毎日のように顔を合わしていた。

彼とは一緒に祈ったり勉強をしたり様々な会合に出たり。会合の設営や運営もやっていた。

(新城はどうせ一生独身だろうな。クソ忙しい日々で恋愛してる暇もない同志。)と、僕は思っていた。

～ある日の事。新城のアパートに呼ばれていた。なんも変わらない日常だと思った。～

いつものように、差し入れの缶コーヒーを新城に渡し『今日も疲れたなあ～』など言いながら

まるで自分の家のようにくつろぐ僕。(ん?? なんか新城の様子がいつもと違うけど?? 気のせいかな。)と、微妙な空気感を感じ取っていた。その直感は当たった。

～彼は幸せいっぱい表情を浮かべている。なんかいい事でもあったのか?? ～

『はし、俺さ。今度の9月に結婚するんだ。』と、新城はさりげなく言った。

『……………。え??』

バケツの水をざぼっと頭にぶっかけられたような瞬間。

『……………。うそだろ??』

(彼女がいる事も聞いてない。いま。結婚って言った??)

『いや。真面目に。9月の結婚式の準備で動いてるよ!』

『いや～! おめでとう!! びっくりした～。彼女がいた事も隠してたな?? にゃろ～! 笑。

ふふ。でもさ、新城くんの幸せがオレの一番の願いだった。幸せになってくれよな!!』

『ありがとう!! 結婚式には来てくれよなあ! (笑)』と新城が言うと。

堪えていた幸せを一気に解き放ったかのような幸せいっぱい表情を浮かべた。

～はあ～。でもなんだか、寂しくもなるなあ～。

あの日の再会から駆け抜けた新城との黄金の思い出の日々。～

～馬鹿ばっかやってさあ。～

いきなり道で倒れて。『それも J A Z Z ! (笑)』と笑い飛ばし。

ある日は土手で『朝までセッションだ!』と約束したのに、

急に爆睡しだした男。起こしてもなにしても起きないものだから

そのまま土手に置き去りにしてオレはチャリで帰ったっけ。笑。

『お前が大舞台に立つなら俺も死んでも駆けつける!』と言って、

僕は自分の動悸と必死に戦いながら遠い遠い町まで。

『約束だから。』と自分に言い聞かせて遠い町まで応援に行った事。

～引きこもりだったオレをグイグイ引っ張って。～

～自分自身のチャンス犠牲にしてまでオレを?? ～

(馬鹿野郎。オマエのチャンスを捨てて欲しいなんて誰が言った！)

(新城、そりゃね～よ。あの後おれがどれだけ自分を責めたと思う？)

～お前がチャンスを投げてエレキギターを置いたのならば。～

～オレはお前の夢を引き継ぐ事でしか恩義の返し方が解らないんだ。～

幾千の眠れない夜を超え、

幾億の星々の瞬く夜空に、

『幸せになれよ！！』と

天を仰ぎし祈りの日々。

～疲れ果てたボロボロの青年男子が二人。深夜過ぎの公園。

ひかり輝く夜空見上げ。ポケットからタバコ取り出してさ。～

『今日もだいぶ疲れたよなあ。』くわえ煙草でオレが言うと。

『ああ。でも。誰かの役に立ってるのならそれもいいよな。』

『明日ちゃんと起きれるかね?? (笑)』茶化してそう言うと、

『意地でも起きてやろ～じゃん! (笑) じゃあな! 風邪ひくなよ!』

ブランコから飛び降りて『また明日な!』新城がガッツポーズでサイン、

『おう! 寝坊すんなよ? (笑)』

新城はCOOLに見せて熱い男。

～前世ではきっと兄弟だったな?? と、僕は勝手に思っている。～

～そんな、戦うような気持ちで過ごした日々が金の思い出として蘇った。～

☆今こうして目の前で幸せいっぱいの新城を見て本当に良かったと心から思う。☆

『んじゃさ〜。俺も、今年は彼女でも作ってみるかな！ (笑)』と僕は冗談半分の決意を述べた。

『すぐできんדרお〜お！！ (笑)』と新城は豪快に笑う。

(そりゃあイケメンセリフだろっ！ あったまキタ！ 笑。)

『そーいえばさ。このアパートからは引っ越すんだろ??』と僕は聞いた。

『うん！ そうだ、ハシも一人暮らししてたがってたよね?? 大家さんに一応話しはしてあるんだけど、もしハシがこのアパートに住むなら敷金と前家賃だけでOK！ と言ってたよ！ 参考までにね!』

(24時間営業のしゃべり場だったな。今度は俺がこの部屋を引き継ぐのも悪くないよなあ。)

『OK!! ありがとう!! この部屋で出世して伝説作っちゃうよオレ☆』

〜親友の新出発を祝うと共に、

自分自身も新しいステージに挑戦する決意の3歩くんなのでした。



## 最終章



## ～桜梅桃李・十人十色～

『桜梅桃李』～おうばいとうり～

桜はサクラの花が咲く。梅は梅、桃は桃、李は李。

サクラの樹から桃の花は咲かない。

人生に置き換えると十人いたら十通りの花があり、

この世に一つとして同じ人間はいない同じ花は咲かない。

僕には僕にし咲かせられない花が、

キミにはキミにしか咲かせられない花がある。

～そんな素晴らしい可能性を誰しもが持って産まれてきた。～

どんな種を持って産まれてきて、未来、どんな花が咲くのか??

若き日の自分と様々な人間模様で織りなされた青春の日々。

『ヒロ君という熱いアーティストとの出逢い』

～新城の結婚式の余興でウタをやる事になり集まったメンバー～

彼は父親が香港出身で母親が日本人。幼少期を海外で過ごす。

日本語、英語、広東語を話せるグローバルな青年だった。

日本の高校卒業した後、音楽修行のために単身渡米した彼。

『才能の塊』ともいえる若きミュージシャンたちに出逢い、

自分自身をも完全に見失って精神も病んで日本に帰ってきた。

彼は自力で立つことも出来ない闘病生活の中、必死に祈った。

そして見事に蘇生し、ラップの大会で優勝する程の実力者に。

ちなみに TOEIC はビジネスレベルの点数を持つアーティスト。

(やべー。本物と出逢っちゃった。)と、新城&元宮以来の衝撃。

～余興の打ち合わせで彼のアパートに呼ばれて出向いた時の事。～

ヒロ君は可愛い彼女さんと同棲中。

観客としてヒロ君のステージを見ていた時、

ステージの上からラップで口説かれたという。(笑)

(なんか人間ぽくていい！(笑) 憎めないキャラだよなあ～。ドラマか？ 笑)

『橋本くん！ 適当に座ってくつろいでて！』そう言って彼が席を外した。

音楽家らしく機材やレコードが置いており本も相当読んでいるようだ。

『橋本君、お茶でいい??』と、彼女さんがお茶を入れてくれた。

『ありがと!』御礼を言ってお茶をすすりながら雑談的トーク。

『彼さ。仕事して活動して、音楽もやって、TOEICも勉強して。通信制の大学も通ってるんだって?? 同じ24時間を生きているとは思えない。スゲー男だよ!』リスペクトの念を込めてそう言った。

『通信の勉強はマジメにやってないよ! (笑) テキストも放りっぱなしだったし。ただ、音楽とか TOEIC の時は祈って黙々と勉強してる。一人の時も勉強してると思うわ。やると言い出したら、私のいう事も全然聞こえないみたい。笑。橋本君も初めて会った時にヒロと同じ匂いがしたわ!』

『同じ匂い? 言い出したら聞かないのは一緒だけど。新城やヒロ君のように真似できないよ。』

『この前、体験談を発表してたよね?? 真っ直ぐに迷いなく語った橋本君の眼差しは真剣そのものでヒロと同じ目をしてると思った。本物だ! って思ったよ! 引きこもりの体験を聴いて、でも人前で堂々と体験談を語ってるって全然別人みたい。すごい勇気もらったよありがとう☆』

『ありがと! 人前に出て喋るタイプの人間じゃないんだけどさ。苦手なままで人生終わりたいくないし、今は本当に修行って感じ。やるぞ! って決めたら人間は目つきが変わるのも新城の姿で教わったよ。』

『彼女さんとはうまくいってる?? 今度紹介してね☆結婚はしないの??』

『結婚はしたいけど、向こうは結婚はイヤだってさ! (笑) 最近までは100%大好きな気持ちがあれば結婚できると思ってた。彼女にとっても一生を左右する問題だからもっ

と頑張らないとなぁ～って。ご縁があれば結婚できるだろうし。今はご縁を信じて頑張ってるよ☆』

～新城の結婚が正式に決まってから。不思議と僕にも彼女と呼べる存在ができた。～

不景気のあおりを受けてレストランの契約を打ち切られた事をきっかけに、

自分の望む新生活のスタイルを真剣に考えて動いていた時。ご縁があった人。

苦手克服シリーズの最終章に選んだのは、引きこもりの原因となった建築業。

大工の時の苦い思い出を心に残しながら生きて行くよりも苦手を潰したかった。

新城の引っ越した後のアパートで一人暮らしを始め、彼女もできた新生活の春。

これ以上の幸せは他になにも望むモノなどなかった。当初の目標ならば9割叶えた。

～『世界一のギタリスト』～

この無謀とも思える夢だけが最後に残された大願。

プレイヤーとしての人生が決まるのは20代前半であり

ここでプロに成れなかったらその先は絶対にありえない世界。

諦めの悪い僕は『自分なりの定義』を付けてギターと向き合っている。

それは『誰かにとっての世界一で在りたい』という夢。

僕の父親が10tトラックの長距離ドライバーだった現役時代、

『同じトラックだったらシューマッハよりもオレの方が速い！！』

自信満々でそう言っていた。おさな心に『スゲー！うちの親父！』

(男とはホントに単純である。そう言いきれぬ自信が凄いと思う。)

『自分にはどんな花が咲くのだろう??』

～桜梅桃李でいいんじゃない?? 無駄な事は一つ無い。～



『橋本くん！ お待たせ！ ジャ早速音を聴かせて！』

家着に着替えてリラックスモードのヒロ君が戻ってきた。

僕はアコギで簡単に2パターンのリフを聴かせて『どうかな??』と聞いた。

『最初のパターンいいね！ それ続けてくれるかな。』

『OK!』そう言って僕がリフを弾き続けると、

彼は唄を口ずさみながらノートにリリックを書いていった。

『一番目は新郎に。二番目は新婦に。最後は未来産まれてくる子供に。』

そう言いながら、どんどんアウトラインを紙に書いていく彼。

フリースタイルが彼の持ち味で即興でもポンポン詩が浮かんでくるようだ。

『ありがとう！ リリックのイメージ湧いたから当日までに完成させておくね！ 後は式の当日に設営と最終の打ち合わせしよう。』と彼は言った。

(得意のぶっつけ本番じゃね?? 笑。レコードありゃ唄える人たちだからか。)

『元宮も式の当日には来れるのかな?? 忙しそうだしね。』

『デビュー決まったから忙しいと思うよ。当日は早めに来れるって言ってたから大丈夫!』

『OK!! 了解です! 最高の結婚式になるといいよね☆んじゃ、なんかあったらまた。○○ちゃんお茶とお菓子ごちそうさま☆』

～短時間の打ち合わせ。ほぼぶっつけ本番かぁ～と思いながら夜空の下。一人歩く月光の道。～

(なんか清々しい一日だったな。ホント不思議な男たちだ。会うだけで元気になる。)

～GOALが決まったならリミッターは即解除。彼らには目標しか見えていない。～

～掴みたい夢にターゲットを絞りロックオン。その姿。獅子が吠えるが如く勇猛精進の青年。～

## ～風呂なしアパートと東銀座～

新城が引っ越した後のアパートにそのまま転がり込んだ僕。

初期費用は敷金と前家賃、火災保険。10万払ってオツリが来た。

家賃は水道代込で3万2000円。そのかわりトイレ共同風呂なし。

新城が住んでた時から事情は良く知っていたのでわりと簡単に考えていた。

～売れないマンガ家が住むようなボロアパートだったけど僕は結構気に入っていた。～

6人家族でマンション住まいだった頃は一人部屋を与えられた事がなかった。

それゆえに、一人暮らしへの憧れは引きこもりの時からずっと持ち続けてた。

(24時間営業のしゃべり場だ!) 新城のコンセプトをそのまま引き継いだ僕。

昼間は仕事でいないけど鍵はかけて行かない。(というか、建付けが悪く鍵がかからない。)

『盗むものなんて何もねえし。好きに使ってくれ。』そんなオープンな部屋だった。

当時は新城も僕も雨に左右される仕事をしていたので、『雨=休日=対話DAY or お勉強DAY』

特別なにもないけど『なぜか落ち着く』と友人たち。まったりゴロ寝して喋って帰っていく。

～親に感謝できるようになったのも一人暮らしを初めてからの事。～

ウェイターの時のお給料や待遇よりもだいぶ悪い条件で働いていた。

雨で休みになっても保障はない。日給月給制。出勤日数×単価=月給。

なるべく安定した生活にしたいと家計簿を欠かさずつけるようになった。

～家賃、高熱費、通信費、食費、交通費、交際費、雑費。～

『今まで、どれだけお金かけて貰ったんだろう。親ってすごいよな!』

毎月毎月、家計簿をつけながら勉強して実践して本当の親の偉大さを知った。

なるべく安いスーパーで買いだめをし、自炊はもちろん弁当も作って持参した。

お茶台も(もったいねえ。)デカイペットボトルのコーヒーを安く買って持って行く。

洗濯も毎回コインランドリーは高いし、作業着なんかは共同の洗面台で手でゴシゴシ洗う。

～服は友人たちからの貰い物。食事は大家さんや先輩が御馳走してくれたり。～

ある日。仕事から帰って来ると玄関の前に『デカイダンボール』が置かれていた。

(なんだ??) と思い、部屋に運び灯りを付けてよくみると『電気式のストーブ』だった。

～そしてダンボールには一通の手紙が挟まっている。～

『外は本当に寒くなってきたから風邪だけはひくなよ! 新城より。』

(あいつ。心までイケメンになりやがったな。サンキュー新城!)

新城だって同じような給料で暮らしている。お金ではない心のプレゼント。

早速、電気式ストーブを付けた。身体だけでなく心まで温くなるサプライズだった。

～僕は貧乏だったけど、お金では買えない最高の仲間がいて幸せだった。～

～当時お付き合いしていた彼女。東銀座の新築マンションでお嬢様暮らし。～

親からの仕送りで生活していた彼女。正直に(すげーなあ。)と思った。

東銀座という土地はセレブが多い。マンションの住人は明らかに金持ちの風格。

彼女の家遊びに行くと、だいたい夕食は銀座で外食。もしくは僕が作るパターン。

『調理師なんだからたまには腕を振るって料理してくれよなあ～。』と文句言いながらも、普段は料理できる環境にない僕。時に教えて貰いながらも自分で調理して彼女と一緒に食べる時間は楽しかった。

～お洒落でセレブリティ。羨ましい環境にありながらも、心はいつも寂しさに溢れていたように思う。～

寂しく感じさせてしまった僕のせいかもしれない。

もっとお話を聞いて欲しかったのかもしれないし、

言わなくてもただ側にいてあげる事で心は満たされたのかも。

『24時間一緒にいてあげられないし。僕にはやらなきゃいけない使命もある。』

～ごめんよ。不器用な男と出逢ってしまったね。でも、キミを護りたいから僕は戦うんだ。～

～言葉では伝わらない想いならば。祈りの中で届けたい。ただ幸せで笑顔で生きて欲しい。～

『百万回の甘い囁きよりも、たった一つの真実が欲しいだけ。』

## 夢追い人

東銀座の彼女の家でまったりテレビをみていた。

六本木ヒルズが OPEN しました。そんなニュースを見て

『明日さっそく行こうよ！！』とアクティブな彼女。

『え?? 明日??』(めっちゃめっちゃ混んでるっぼいよ??)

ちょっと渋りつつも僕には決定権などない。

～六本木の行き方も知らなかったほどの世間知らず。～

『準備できた?? じゃ行こう～☆楽しみだねえ!!』めっちゃ張り切る彼女。

女性にしては高身長で足の長い彼女は



黒髪をなびかせながら銀座の道を颯爽と歩いていく。

少年の頃にサッカーばかりやっていた僕は足が短い。

あまりにもサクサク歩くのでついて行くのがやっとだ。

『ちょっと待てよ！』

『え??』

『迷子にならないようにな☆』

(オレがな！ 笑。道案内頼むぜ。)

僕はさりげなく彼女の手を掴まえて手と手を繋いだ。

誕生日にプレゼントしたペアリングを彼女は最近ずっと着けていない。

そんな些細な心の揺れに気がつかない僕だと思うかい??

『乙女座』なんて意味のない言葉なのだろう。そう思っていたけど。

これじゃ、どっちが男でどっちが女なのか解らないほど、

繊細な感性に自分でも付き合いきれない時があるんだよ。

電車で揺られながら、『聞いて聞いて』のお喋りさんの話を聞いているフリの僕。

聞いてるふりして上の空。

どうしてペアリングを着けない？ 僕のことをキライになったのか？

～結婚はかんがえられない。～

そんな風に言われちゃ～夢追い人は人の何倍がんばりゃいいんだ？？

## 夢追い人2

オープンしたての六本木ヒルズはとても賑わっていた。

お洒落な大人たちの集まる場所でさ、

いちいちお洒落なモニュメントとか飾ってあったり。

いちいちオシャレなベンチに腰掛けて一休みする。

オシャレな大人の女性に目を奪われて眺めていたら、

僕の隣の彼女が鬼の形相でツンツンしている。

アニメみたいな『ノーテンキな男とポジティブ女のカップル』

『夜はなにを食べようか？』

『私はなんでもいいよ☆』

『イタリアンにしようか!』

ってもどこの店も行列だし値段も優しくない感じ。

頭の中で財布の所持金と相談しながら店を探す。

結局、麻布十番の駅まで歩いても店もあまりないし決めきれず。

もう、腹もぺこぺこだし、どうみても彼女のテンションは限界だろう。

奇跡的に見つけた『焼肉屋』の看板。でも、どうみてもお洒落ではない。

『焼肉でいい??』

正直に言って食べるモノは本当になんでも良かった。

ここまで来たのだからヒルズの展望台で良い気分になりたいだけなのだ。

## 夢追い人 3

～六本木ヒルズの展望台から見下ろした夜景～

曲がりくねった道をミニチュアカーが行列をなして走る。

渋滞でもしてるのだろう大都会の道をゆっくり進んでいく。

バカでかいトラックでさえも本当に可愛いミニチュアカーに見える。

人の流れもうっすらと見てとれる。(これから食事かな？ 買い物かな？)

東京タワーのイルミネーションがこんなに綺麗だったなんて初めて知った。

灰色のプラネタリウム東京の空模様。

この日は人間の躍動する息吹を感じた。

(こんなに狭い世界で生きていたんだなあ。

この狭い世界の中で皆それぞれに夢を抱いて生きている。)

気持ちがすれ違って傷つけてしまった日もあった。

ひどい言葉を言われ傷ついた日も遠い過去の話し。

頭の良さを比べたって対した差なんてあるわけない

生きてる限りは絶えず何かを学んでるのだから『最後に笑えればいい』

どんな人でも光と闇が等しく同じ量だけやってくるなら、

俺らは、迷わずに光の道を選んで歩いて行けばいい。

～僕の隣で一緒に夜景をみている彼女も夢追い人。似た者同士の縁だね。～

まだまだほんの序章に過ぎない二十二歳の青春。

人よりもちょっと遅れてやってきた春と、

人よりもちょっと遅めの青春の日々。

## 3000人の精鋭を代表して

こんなのはほんとした僕でも心の中に熱い情熱を抱いていた青年期。

当時、所属していた人材グループの精鋭たちが結集する大会を夏に控え、

各方面の代表としてスローガン作りと宣誓のメンバーに選ばれた僕。

東京だけで約3000人いる同期を代表して8名がスローガン作りに結集した。

(昨年度は新城がこの大任を任されていた)

～都内某所にて大会スローガンの打合せが行われた。～

みんなの眼をみればヒシヒシと伝わってくる熱い思い。

(僕も同じだ。同期の心や声を伝えにきたのだから責任持ってやりきろうではないか。)

自己紹介が終わるとさっそくメインスローガンのアイデアをだしあった。



指名された方から時計まわりに思い思いのワードやアイデアを発言していく。

僕の隣に座っていた方の発言が終わろうか？ という空気になると、

(次は自分の番だな。)と、僕の体にぴりりと電撃が走った。

(伝えたいことならばもう事前に決めてある。)軽く深呼吸をした。

『では橋本さんはなにかありますか？』

『～妙法の諸葛孔明たれ～という一説が胸に残っています。諸葛孔明は劉備という君主に真の忠誠心を持っており一切の戦いの先陣をきって君主を守り抜いたそうです。死せる孔明、仲達を走らす。というエピソードがあります。死してなお凄まじい気迫の孔明、それを見た生ける武人が恐れをなして逃亡した。僕も三国志は勉強中なのですが、このタイミングでの～妙法の諸葛孔明たれ～というご指導には意味があるように思って同期のみんなとも話していました。』

次の方も、

『僕も妙法の諸葛孔明がいいと思っていました！ 橋本さんが説明してくれた通りタイミングの妙を感じています。』

『どれも大事だけどメインスローガンは旬なワードがいいですね??』

『俺らは、妙法の諸葛孔明だ！！ と、言い切って宣言したほうが決意もあっていいと思います！』

新小岩のミスターがまとめの言葉を放った。

～我ら、妙法の諸葛孔明！～

大会のメインスローガンが無事に決まり各種宣誓文も順々に決定した。

(どうにかうまく、みんなの気持ちを代弁できたかな?? 当日まで元気一杯やりきろう!)

## 3000人を眼前にして放つ言葉

～大会の当日～

僕は舞台裏で担当する箇所や宣誓の流れを入念にチェックし、まだ誰もいない講堂の舞台上でリハーサルをした。

『では、皆さん！！本番は元気良く！！みんなを鼓舞する勢いで全力でいきましょう！』司会者の方が熱い想いを口にすると、皆、それに呼応した。

沸々ともみ上げてくるアツい思い。

引きこもりだった僕は人前で立って話すことなど考えられなかった。

(あ～、そいえば小学生の時から苦手だったなあ。国語の授業で立って朗読とか緊張してさあ。)

新城と再会してグイグイと引っ張ってもらって、今日は俺が3000人を目の前にする役目か。

～広い講堂にびっしりと埋め尽くされた約3000人の熱い獅子たちを眼前にし、

時間にしたら30分程度。宣誓文を8人で元気いっぱいやりきった～

3000人の前ではさすがに緊張して足がプルプル、声は震え気味でした。

みんなにばれてなきゃいいなあ～なんて思いながら、

『はっしーなんか声震えてなかった??』と同期にツッコまれ、

『え? ビブラートかけちゃったかな? 笑』

僕は知らん顔でとぼけてみせる。

～3歩くん。次はバンドでステージにたてるといいよね☆～

## 3歩進める時もある

3000人を前にするステージは、

普通に生きてたらそうそう経験することがないかもしれません。

自分がちょっとまえまで引きこもりだったことなど、

忘れてしまうくらいに過去の話しに思えたのです。

『人は決意した瞬間から幸せの軌道に乗る。』

そのことを少しは証明できたかもしれませんね。

『ありがとう』の意味も解らなかった少年が観た景色は、

果たして皆様の目にはどう映ったでしょうか？

もちろん、表現力の問題もありますし、

誤字脱字だらけの幼い文章で伝わらなかったかもしれませんね。

本編の後半は宗教色が若干強い内容だったかもしれませんが、

一人の人間の蘇生のドラマとしてお気軽にお読み頂けたなら幸いです。

一人から一人に伝わる熱い思い。

溢れ出る『ありがとう』の気持ちを伝えたら、

一人から二人へ、いつしか3人になり。

三人集まれば、文殊の知恵、

『一人で100歩すすむ』よりも

『三人の一步は無限大』

新城と再会した日。

一人と一人から始まった蘇生のドラマ。

心の故郷沖縄とエレキギターの縁。

蘇生のドラマを締めくくる時、

幼き日の自分と父のやりとりを思い出す。

『あきのりは友達100人できるかな??』

大人になった僕は言う。

『できたよ。100人。それに、もともとみんな友達みたいじゃん!』

## ていんさぐぬ花～沖縄民謡～

心の故郷・沖縄の言葉と母の教えを

物語のエッセンスとして使わせていただきました。

『命が大事』～ぬちどうたから～『なんくるないさ～』

沖縄人の気質は陽気でポジティブ。

人間性が豊かでとっても魅力的に見えます。

沖縄の農村では、親が子に唄をきかせて

知恵を伝承する風習があるみたいです。

『ていんさぐぬ花』という素敵な沖縄民謡☆



ていんさぐぬ花とは鳳仙花のことです。

沖縄では古来より、魔除けの意味として、

ていんさぐぬ花から出る汁を爪に塗って染めていたそうです。

ていんさぐぬ花を爪に染めるように、

『親や年長者のいうことを大事にしよう』

そのような教訓をウタとして伝えています。

本来は1番から十番まであるそうですが、

4番目の詩をご紹介して終わりたいと思います。

宝玉（たからだま）やていん（宝玉といえど）

磨（みが）かにば錆（さび）す（磨かなければ錆びてしまう）

朝夕（あさゆ）肝磨（ちむみが）ち（朝夕と心を磨きながら）

浮世（うちゆ）渡（わた）ら（日々を生きて行こう）

『三步進める時もある』

連載の本編はこれにて幕を下ろします。

長期に渡り、温かいご支援をありがとうございます。

皆様への感謝の意味を込めて

『ていんさぐぬ花』にまつわるエピソードを添えました。

『その後の三步くんと仲間たち。』

橋本 昂祈

## その後の3歩君と仲間たち

2006年7月某日

僕は期待に胸を膨らませて日本武道館へと向かった。

東京メトロ九段下駅で降りる。祭りのような熱気が伝わってきた。

『新城のヤツ、遅せ～な。友人の晴れ舞台だっちゅ～のに。仕事なんか断れっての！』

物販コーナーでぶつぶつ文句言いながら待つこと30分。

携帯電話をひらくと新城から一通のメールが届いていた。

『あと5分後に九段下に着きます。遅れてごめん！ 新城』

僕が駅近くまで迎えにいくと、

汗だくで重そうな荷物しょってる新城を発見。

『ごめんごめん！急に仕事頼まれちゃってさ！』

『まあまあお疲れ！まだ時間あるから、お茶でものみいこーぜ！』

休日に新城と遊び目的で会うのは何年ぶりだろうか？

新城が来る前にタバコを吸える場所抑えていたので歩きながら話す。

『元宮がまさかねえ～。武道館でL I V Eって凄いなアイツ。』

『しかし、よくチケット取れたね？買ったの？』

『買ったさあ～！ネットオークションで2倍の価格でな！（笑）』

幼なじみとしてどうしても元宮の晴れ舞台をみたかった。

白の肩がけバックからチケットを取り出して新城に渡した。

『新城、帰りにはメシ位付き合ってくれよな！可愛い女の子もお誘いしてある。』

『オマエ～！ いつからそんなにチャラくなったんだ?? 失恋のショックはどうした  
(笑)』

『初恋は実らないから良き思い出。それに夏だよ?? 今日祭りだ!!』

## MYWAYを聴きながら

人生初のボーズ頭にしてから、なぜか、モテ期到来??

髪型ひとつでこんなに印象が変わってしまうなんて。

罰ゲーム的なノリで坊主にしたら人生観が変わった。

だって、元気とノリのよさでカバーするしかないじゃん!

でもさ、モテ期とか要らんから髪の毛早く伸びてくれ~!

熱狂的な盛り上がりを見せる武道館のゲート前。

デカデカと掲げられた看板を見上げた。そこには、

~Def Tech~

Live Tour 2006 lokahi Lani~Catch The Wave~

インディーズながら、累計・数百万枚のCDを売り上げ紅白歌合戦にも出場した彼ら。

彼らが歌うありがたいの唄を聴いて思い出すのは、僕たちの小学校初登校の日。

姉に手を引かれてマンションの階段を降りると、

ピカピカのランドセル背負って黄色の帽子被った子が二人。

ぽちゃっとして色黒のヤツがさ、

『おはよう！！』って挨拶してきたんだ。

僕がもじもじしてたら、そいつが急にマジになって

『おはようって挨拶したんだからお前もしろよな！』

その言葉に〜カッチーン〜ってキレて更に口を閉ざしたっけ。(笑)

世話焼きでおせっかい、生意気にみえてナイーブなところがさ、

新城とそっくりだよ元宮。そして僕も似たような縁か。

オレも新城もこのステージに立てないっぽいけど、

今日は思う存分、踊って楽しませてもらうよ！！

Mr Def Tech micro

そして、

チャンスより友達を選んだ男・新城と共に、元宮の活躍を心より嬉しく観ている。

はじめて執筆した自分史の華として紹介させてもらうよ☆

新城、元宮、引きこもりだった僕に夢を与えてくれて心からありがとうを言うよ。

三步進める時もある。～引きこもりからの蘇生～

～ f i n ～





## あとがき

2014年11月から連載始めて、今日までの約半年間。

長期にわたり、ご支援や温かいお言葉を頂きました。

皆様の熱い応援があったからこそ、挑戦の日々を送ることができました。

『本当にありがとうございます！！』

僕自身の歴史書、『三步進める時もある』

この本は僕の宝物であり、原点回帰の書です。

連載を進めるにあたって、個人名や団体名など仮名に変えました。

パプーでは、ブログのように更新できるメリットを享受しながらも、

やはり、発信者としての責任はかなりヘビーなモノがあります。

連載では扱うテーマがナイーブだったので、より慎重にと心がけました。

少しでも、何かの気づきや励ましになれたならば嬉しいです。

～作品を彩るワードたち。～

『両手マスカケ線』『沖縄言葉』『827は素数』『B型のおとめ座』

『逆ギレ王子』『BABYあきのり君』『インナーチャイルド3歩くん。』

『たまにビジュアル系の血が湧く』『苦手克服シリーズ』『チャレンジ人間』

振り返ってみると、自分でも突っ込みどころ満載の青春。

もっとお笑いの要素を盛り込めば良かった！

なん〜て言っても、後の祭りで連載終了。(苦笑)

新連載の予定は未定ですが、またお読み頂けるように精進いたします☆

世界でたった一人だけの特別なあなたへ、

『笑顔で生きていきましょう！』

『最後までお読み頂きありがとうございます！』

P S せめてもの癒しの時間でもありますように。

2015年5月23日 橋本 昂祈



---

3歩進める時もある～引きこもりからの蘇生～

---

著 橋本 昂祈  
著 Akinori Hashimoto

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---